

CITY & LIFE

都市のしくみとくらし

1987・夏号

Vol. 9



特集
都市と水辺

巨 大 な ビ ル 群 網 の 目 の よ う に ひ る が る 道 路
 そ れ ら が 都 市 空 間 を 埋 め つ く し た 現 在 一 見
 す れ ば そ こ で は ゆ と り の 場 と 呼 べ る ス ペ ー
 ス が 失 わ れ て し ま っ た か の よ う だ。
 し か し 水 辺 に は 潤 い が あ り、憩 い が あ り、見 透
 し の き く 広 々 と し た 空 間 が あ る。そ れ は 都 市
 の 残 り 少 な い ゆ と り の 場 で は な い だ ろ う か。
 こ の 水 辺 の ゆ と り の 場 を 保 存、開 発、景 観 設 計
 な ど を 通 し て 考 え て み た い。

Contents

特集◎都市と水辺

- 今水辺を問う意味とは／富山和子……………2
- 〈座談会〉都市生活と水辺……………5
／川田順造・小林治人・日笠端・高見澤たか子
- 治水・利水・親水は矛盾しない／高橋裕……………11
- 水——ボイドな空間／上田篤……………14
- アメリカに見るウォーターフロント再開発による
都市活性化／川端直志……………17
- 水の創造力／高田みどり……………22
- 都市の水辺空間のデザイン／鈴木信宏……………24
- 隅田川の歴史——江戸から東京／陣内秀信……………28
- 都市河川のアメニティを実現させた野川／酒井憲一……………32
- まちづくり思い出ばなし⑧／高山英華……………36
- バックナンバーの紹介／編集後記……………37



ニューヨーク・エクソンビル前



ボストン・チャールズ川

表紙●Ralph Fasanello

写真撮影●徳田敦司 表2／川田順造 P6、ニジェール川／原口武彦 P6、アビジャン／日笠端 P10、ストックホルム、シアトル／宮治一雄 P10、カルタゴ／小林治人 P10、グリモア港、ゴールドコースト／川端直志 P18～19／鈴木仁長 P23、鈴木信宏 P24～27、佐藤真 P34、神山貞次郎 P3.35

今水辺を問う意味とは

富山和子

今、親水ということがよくいわれています。あるいは水と緑のまちづくりであるとか。そのこと自体は大変けつこうな事なのですが、気になるのは、ほんとうに水のことか分かつているのだろうか、ということなのです。

むしろ、今は水のことか分からなくなっているんじゃないでしょうか。日本人がこれまでどうやって水とつきあってきたのか、あるいは、水とどうつきあっていたらいいのか、分からなくなっている。

私が最初に申し上げたいのは、その分からなくなっている水について、分かるようになるための入口として、親水ということが重要な、ということなのです。ところが、親水とか水辺とか語られる意味は、どうもそうではなくて、単なる水のレイアウトであったり、景観としての水辺であったり、ようするに素材としてのH₂Oであるように思われる。これは大変残念なことです。

水は人間がつくりだしたもの

親水や水辺ということは、私たち日本人の長い歴史の積み重ねのなかからはぐくまれた水とのつきあい方、ある意味で複雑な生きものである水を手なずけてきた日本人の文化をとりもどすことである、というのがまず前提です。そのためにこそ、親水、水辺が必要なのです。

もう少し具体的に言いたいです。水資源というと、蛇口をひねれば簡単に水が出てくる、それが今では当たり前になっていきます。けれども、それはほんの最近になってからのことです。日本人は水を得るために、大変な努力をしてきたのです。日本人の先祖たちの努力の歴史の積み重ねのうえに私たちの蛇口の水があるということをし、思い出してほしい。

日本の川というのは、地形が急峻でよく滝のようだ、といわれています。大陸の大河などと違って、大雨が降ればどつと流れ出し、みな海へ捨てられてしまう。そこで日本人の先祖たちは、なんとか水を陸地にとどめておこうと大変な努力をしたわけですが、治水は治山にありといわれますが、つまり森林を育てることが大切なのです。

よく原生林といいますが、日本列島に真の意味での原生林はない、といっているでしょう。縄文の昔から、日

本の先祖たちは木を植えたり、手入れをしながら、森林を育ててきたのです。その森林が水をたくわえてきたのです。ただの石の山だったら、水はみな海へ流れていってしまふ。ですから、水は天からもらっているというのはおおまちがいで、森林のおくりものなのです。しかもその森林は人間によってつくられたものですから、一滴の水であれ人間の労働の産物である、といってもいいのです。日本人は、そうやって水を人為的に、いわばつくってきたのです。

この前テレビでお話したのですが、熊本県の阿蘇の山麓に御船町というまちがある。江戸時代にそこに人が住もうとしたのですが水がないわけだ。阿蘇というのは、火山ですから木もない。それで、半世紀にわたって村中で木を植えた。そうやって半世紀たってみたら、枯れた川筋に水が出てきて、とうとうたなる流れになったのです。それで用水を引いて、そこを水田地帯にして、人が住むようになった。それが今の一級河川の緑川の水源になっている。

熊本県だけではなく、日本中にそうした先祖たちの足跡があります。植林して水をつくり、川をつくり、ダムをつくり、トンネルをつくり、水路をつくり、そうやって水をかきあつめ、あるいは水の交通整理をして川をつくってきたのです。多かれ少なかれ、日本の川は、人間が参加してつくってきたものなのです。

自然との緊張関係から生まれた川の文化

もうひとつ水そのものをいうと、日本人は常に水と緊張関係をもってきた。日本は雨量が多い。地形は急峻なうえ、雨の降り方は、どつとまとまって降るのが特徴です。梅雨や台風のとくに集中豪雨となり、あとはカラカラに乾いてしまう。日本は、きわめて水とつきあ



にくい土地なのです。しかも、私たちの住んでいる平野は氾濫原です。洪水の通り道なのです。雨はめぐみであると同時に、凶器でもあります。水を治める者が、国を治めるといわれるように、治水は重要な課題であり、常に日本人は水との緊張関係のなかで生活してきたのです。

緊張関係は、なにも川と人間だけの間にあるわけではありません。たとえば、川の上流と下流では水をめぐってしばしば対立しあいます。水不足になれば、少ない水をめぐって争うことになるし、洪水になれば、どこかが犠牲にならないければなりません。しかも、上流と下流は常に相対的な位置関係にある。上流であるとともに、もうひとつ山側の村から見れば下流であるという、関係にあるわけです。

そうしたなかから生まれてきたのが、たとえば香水という水のローテーションです。四国には線香番水というのがある。これは、線香をたてて、線香が燃えつきるまでは堰をあけて、燃えつきると堰をしめて、その下流には水を流さない、といった水のローテーションです。上流と下流という関係のなかから、そうした秩序が自然に形づくられてきた。日本の共同体というものは、水利用によって形成され、そして、共同体の秩序も、こうした水をめぐる秩序を通して形成されてきたものでした。

平野は氾濫原であるといいますが、それは森林がたった豊かな土壌を、川の洪水が運び、それがたまってできた土地だ、ということ。ですから大変豊かな場所です。

森林をつくり水を集め、川を交通整理し、そして水を使ってきた田んぼで米をつくり、その米は川を使って運ぶ。そうやって見わたしてみると、江戸時代以後の私

たちの文化は、水と人間、水をめぐる人間と人間の緊張関係のなかから生まれた。まさに「川の文化」だったのです。

昔の話を聞くと、そうとう山奥の沢筋まで船で行けたようです。お城のあるところはたいがい堀割がありますし、段々畑にも水がはってある。日本中どこも水だらけだったといっている。私たちは現在なにかにつけて石油をつかっていますが、同じように昔は何かにつけて水を使っていたのだと思う。けっしてオーバーな表現ではなく、日本列島は水の列島だったのです。

日本人のなかで水に対する意識が急激に変わったのは、じつは戦後です。自分の労働で水をくまなくてもすむ、蛇口をひねればすぐに水が出る、そういう社会になったのは、ずっと最近になってからのことです。

日本人は水が豊かだから、水を大切にしない民族だと、専門家でさえ口にする。それは違う、と私は書いてきました。水を大事にしなくなったのは、労せずして水を得られるようになった最近のことです。したがって、しだいに水への関心も薄れ、水のありがたさも、またこわさも忘れてしまったわけですね。

水の文化に結びつくまじりつを

水を語るということは、今申しあげたように、日本の文化をもう一度問い直すことであるし、そういう意識で見なにかぎり水は分からないままに終わってしまうでしょう。水辺のまちづくりをするなら、そういうことをふまえたうえでやるべきで、水は単なるH₂Oではない、と思います。私たちが子供のころ、学校帰りにゲタを水やドブに放り込んで、それがいきおいよく流れていくあとを追っか

けるというような遊びをよくやりました。ゲタがどういう風な流れかをするか、坂になれば流れも早くなるとか、そんなことを考えながら帰ったものです。水のしくみが分からないと、ゲタがどこへ流れていくか、分からない。今、水を見る、川を見るということは、このゲタ遊びのように、水を知ることです。水のしくみや性質、そしてそれがどこから流れ、その上流はどうなっているのか、つまりそれは日本列島がいったいどうなっているのか、そうした大きな問題に結びついていくことなのです。

前橋に広瀬川という川があります。きれいにレイアウトされた川で、水辺のまちづくりのひとつのシンボルになっています。利根川の支流で前橋市民にとってはまちのシンボルではあっても、実際に飲み水には使っていない。ところが、その下流である東京都民にとっては、重要な水源になっているわけです。水というものはそんなふうになまじりつで流域の町と町とが関連しあっています。

親水の意味は、まさにそうした水の特性を知るための入口でなければならぬと思います。最後につけ加えると、自然というものは利用してこそ守れるものであり、本当はただながめていけばいいというものではないのです。昔から日本人は自然を利用することを守ってきた。水辺という問題も、私たちがいかに水辺を高度に利用できるか、できればいかに生産活動に結びつけることができるか、ということが課題ではないでしょうか。

水と日本文化の緊密な関係をもっとよく知っていたいただきたいと思い、今、『日本再発見・水の旅』（文芸春秋）という本を出したばかりです。ぜひお読み下さい。（談）（とみやま・かずこ 立正大学短期大学部教授）

都市生活と水辺

人間は水辺とどうつきあってきたか



川田順造
(かわだ・じゅんぞう)
東京外国語大学教授



小林治人
(こばやし・はると)
(株)東京ランドスケープ
研究所代表取締役社長



日笠端
(ひがさ・ただし)
東京大学名誉教授・東京
理科大学教授



高見澤たか子
(たかみさわ・たかこ)
生活評論家

座談会

水のシンボル性は万国共通

高見澤 最近、水辺の景観、水辺と都市というように、水辺のことがいろいろ話題になっております。本日はそういった水辺と都市の関係についてお話ししていただきたいのですが、まずその前に、人びとが水というものに對してどんな信仰や習慣をもち、どのようなかたちで水とかかわってきたか、そのあたりからお聞かせいただきたいと思ひます。

川田先生は、文化人類学の調査でアフリカに長くおられたそうですが、アフリカを知らない私などは水とはあまり縁のない土地のように思ってしまうのですが、先生のご本を読ませていただきますと、雨期と乾期がはっきり分かれていて、その差が大きいようですね。日本とは、おのずから水に対する感じ方も違ってくるでしょうね。川田 もちろんアフリカも水と縁がいろいろあります。海とのかかわりから申しますと、地形的に言えば海岸線は単調です。大陸棚がなくて急に深くなります。また海岸に近い

地域は高くなっているところが多く、全体的に見ますと大陸のなかでくぼんだような形になっている。ですから内陸水系が発達しています。チャド湖という大きな湖を中心に、何本か川があります。西アフリカには全長四〇〇kmのニジェール川があります。これなどは元々一筋の川だったわけではなく、幾つもの湿原や沼がつながってできたといわれています。これが砂漠に向かって張り出した大湾曲部なんかは、一面の水の世界なんです。東アフリカにも幾つもの湖がありますし、南アフリカのオカバンゴ盆地のあたりにも内陸水系です。このようにあちこちに内陸の湖や川があって、そこで人びとは水と密接にかかわってきた。アフリカという砂漠とサバンナのイメージを日本ではもたれているようですが、じつは水とは大変縁が深いんです。また、別の観点からいいますと、水のもっている象徴性の問題があります。もちろんアフリカだけに限ったものではありません。水をめぐって世界にかなり広く認められることですが、まず、豊饒というか、生命を生み出す元として水はとらえられています。また、水にはけがれを洗い清める力があると信じられています。さらに、我々の今住んでいる日常的な世界とは違う異界の象徴でもあります。この三つめの異界性は、身近な例で日本の昔話にもよく出てきますね。桃

太郎の桃も川を流れてきましたし、一寸法師はおわんの舟に乗って旅立って行きますし、浦島太郎がめざした竜宮城は、やはり海の彼方にあります。アフリカでも大河や湖という異界に棲む動物、たとえばワニやカバは聖なるものとして信仰の対象になってきました。また、水の世界と陸の世界をつなぐメッセンジャーとして、民話や寓意の世界でカエルが重要な役割をもっています。

日笠 人間が水を重要なものとしてあがめたり、うやまつたりするようになったのはいつごろからなのでしょう。これは宗教とも関係があるでしょうが。

川田 たとえば、聖書でイエスが「自分は泉だから渴いた者は来て飲むがよい」といっていますね。かなり古くから水は生命の根源にたとえられていたと思われまふ。アフリカの宇宙開闢説にも水は登場します。西アフリカのドゴン族では天から降ってきた雨が人間に初めて言葉をもたらした、とされています。東アフリカでは、雨をコントロールする者が王になっている社会がいくつもあります。私の長くつきあってきた西アフリカのモシ王国でも、王様の名前には民に恵みをもたらすものとしての水や雨や湿原の比喩がたくさん用いられています。メキシコのアステカにもトラロックという雨の神が重要な神

高見澤 仏教などでも、生きものの構成要素である四大というのでしょうか、風や土、水とともに水という観念が入っていますね。

川田 清める力をもつものとしての水の観念も、かなり広くいろんな文化に見られます。日本のみそはいい例ですが、キリスト教の洗礼も元米泉でからだを清めたあと聖油を塗る。インドのベナレスの沐浴、水の乏しい砂漠のイスラムでも、わざわざ人工的にイスラム寺院のなかに泉をつくって、そこかならず手と顔を洗ってお祈りをしていますね。水というものは、不思議な浄化作用があると考えられているんですね。

先ほどお話ししましたニジェール川という大河の周辺に住むアフリカ人は、その大河でからだを洗い、洗濯もする。大便や小便もする。また、向こうでは魚を釣っている……とにかく同じ川の水でいろいろなことをやってしまう。それで汚いとも思わない。そういう光景を見ていると、水は人間生活にとって大変な恵みですが、同時に水の浄化力に対する信仰というようなことを考えさせられます。

小林 今の話で思い出しましたが、ボルブドールという遺跡の調査でジャワに行ったときに、やはりそういうような使われ方をしていました。現在でも変わりなくあるんですね。ただ、日本の場合はどうでしょうか。

川田 厠(川屋)なんていうのも、もともと川の上に張り出していたんでしょうね。

高見澤 そうですね。そして川の水で洗いのものもしました。田舎に疎開をしましたときに、川に下りてお茶わんを洗った記憶があります。流れている水はきれいなんです。水に対する畏れというのはどうでしょうか。たとえば水神とか。

川田 日本でも漁師が海で魚をとっているときに水死体

があがると、恵比須さまだといって縁起がいいといわれたり。水は生命を生み出すと同時に、死とかあの世への媒体でもありますね。

高見澤 精霊流しも、やはり異界とのつながりを見ていののでしょうか。浦島太郎の話もそうしたことを行拂とさせますね。

水運といふコミュニケーション

高見澤 今お話をうかがってありましたら、ジャン・コクトーの『オルフェ』という映画を思い出しました。あれは水鏡を異界の通路として使っていました。水に対するイメージには万国共通のものがありませんか。

川田 鏡としての水というのがありますね。ギリシア神話のナルキッソスは自分の姿を水に映したわけですし、日本で常磐津の所作にもなっている『戻り橋』、橋の上から川の水に映った美女の顔を見ると鬼になっている。鏡としての水というものは水に対するかわりとしてはひとつあると思います。

小林 日本では神道の関係からいってみそぎとか、ずっと古くから水をシンボリックにとらえていたようです。高見澤 平泉の毛越寺の池なども船を浮かべて極楽に見立てた島へ行くわけですね。

小林 まさに信仰の対象といえるんじゃないでしょうか。日笠 厳島神社なども水のなかに神殿や鳥居があります。高見澤 沖繩のニライ・カナイは海の向こうに極楽があるという考え方ですね。川田先生のおっしゃるように異界の象徴です。

川田 東京にも昔は井戸が随所にありましたよね。井戸というのも異界への入口です。怪談で有名な『番町皿屋敷』のお菊の幽霊は井戸から出てきますし、森鷗外『阿部一族』のなかに、島津の殿様が亡くなったあとで、

貴重な水を求めて方々から集まってくるアフリカ西部のアビジャン



殿様がかわいがっていた鷹が井戸に飛び込んで殉死するという話が出てくる。井戸、あるいは水が死とか冥界とつながる、そういう性格をよくあらわしています。

高見澤 川田先生は、確かお生まれも川の近くですね。

川田 そうなんです。小名木川のはとりで生まれ育ったんです。九代前から実家が本所深川の方で商人をやっております。あの辺の運河や堀割りは私の幼児期の記憶に鮮明に焼きついていて。土左衛門なんかときどき流れてきましたね。

毎朝浦安の方から八百屋さんとか、貝を売るとか、船で家の前に上がるんです。私のひいおばあさんも、おばあさんも川越から船で嫁にきたんです。川越と深川は、今ではちよつと考えられませんが、ほんとに近かった。私も川越の新河岸川へ行ってみたことがありますが、昔は川沿いに肥料問屋とか薪炭問屋がたくさんあって、隅田川を通して東京の下町と取り引きしていたんですね。川が陸上のクルマの交通が発達する前の、重要なコミュニケーションのルートだったことがよく分かります。小名木川も、家康が行徳の塩を江戸に運ぶために開鑿されたわけですが、私の生家のなめ向かいに「銚子場」という肥料にする干鰯(しほ)をあげるところがあって、銚子から船で鰯を運んできたんですね。川筋のコミュニケーション・ルートをたどってみるとまた全然違った人間のかかわりあいの地図が浮かび上がってきます。

日笠 学生の都市計画の演習で私も川越へ行っている話を聞いたことがあるんですが、新河岸川にはお米を積み出す倉がたくさんあって、江戸時代には大変栄えたらしいですね。それで、江戸から歌舞伎役者をよんだりしたそうなんです。それが鉄道が通る時代になって、あそこへ国鉄を通そうとしたらしいんですが、地元民の猛反対を食ったというんです。水運がダメになるっていうんで。それで結局鉄道計画はボシヤッちゃった、という話



ニジェール川河畔で洗濯し、水浴し、排便し、魚をとり、舟で行く人びと。生活と多面的に結びついた川の原型がいまも見られる。

を聞きました。

小林 そのころの家並みは、川から見た景色を意識していたようですね。今のようには道路が中心になるとみんな川に背を向けちゃいます。

川田 昨年、フランスの人類学者のレヴィ・ストロース先生が日本にいられたときに、陣内秀信さんたちといっしょに東京の堀割り巡りをしたんです。あらためて感じましたが、今の東京では水というのはほんとにじやま者あつかいされているんですね。周囲を護岸で固めてしまつて、水と親しもうという姿勢が全くなさ。日本橋川なんて水も汚くてよどんでいるし全くひどいものです。そのすぐ後にパリに行きましたら、ちょうど「水の町としてのパリ」という展覧会をやっていたんです。フランスも、ルイ十四世の頃に運河がたくさん掘られて、川の輸送が盛んでした。パリでも感心したのは、サンマルタン運河をきれいに保存して、昔の運河を都市の景観として上手に生かしている。東京はその点惜しいですね。

小林 そうなんです。横浜あたりでもずいぶん埋めてしまいましたが。

水辺は最良のアメニティ空間

高見澤 水に対して人間がどんな意味を与えてきたか、また水が重要なコミュニケーションの媒体であったというお話しは大変興味深いことです。

ところで、小林先生は各地で景観をデザインされてきたわけですが、そのなかで日本人特有の水に対するあこがれとか、そういうものを感じになったことはございますか。また、それを意識的にデザインのお仕事に生かされたとか……。

小林 そうですね。それに対する直接のお答えになるかどうか分かりませんが、こういうことはいえらと思うん

です。私のやっているランドスケープ・デザインという仕事は、生物の原則を基礎とした空間づくりといえるように、そういうことがまず前提にあります。そうしますと、やはり水というのはベースになってくるわけです。川田先生がおっしゃるように生命の元といましようが、生命の躍動感といましようか、そのあたりで水は大変重要な要素になる。

最近都市計画のなかでよくアメニティということばを耳にします。これは東京工大の中村良夫先生が風流と訳されたら、京都大学の中村一先生は風致と訳されたり多少解釈のしかたが異なりますが意味は同じです。つまり水辺の「樹下に風致あり」というわけです。これは私流に言い直しますと、木陰ごしに水辺を見、さらにそこでおいしい食事ができる。こういうことが人間にとって一番のアメニティだろうというわけです。昔から、おいしいものを頂く場所は水辺が多かったですね。空間構成的に見ても、木があつて水があるというのはイメーজとしていい。人々が根源的に求めているのはやはり水なんじゃないか。したがって風景をデザインするにあつてこの水を最も重要なベースとして考えるようにしているのです。潤いとか、安らぎとか、そういうものをもたらす水景観計画・風景デザインには水はつきものなんです。高見澤 景観のなかには、確かに意識的に水を取り入れている場合も多くあるようですが、日本人の生活の場ではどうでしょうか。たとえば庭のしつらえ方とか。

小林 水戸に借楽園がありますね。この借楽園と高松の栗林公園、そして金沢の兼六園、これら三つの名園を技法的に見ますと、借楽園が最も技法というのを感じないんです。ところが、あそこにはご存知のように千波沼があるんです。借楽園というのは、千波沼を借景としてうまくそれを風景に取り込んで日本人の心にびびく風景四季の情景を演出しているんです。

のあたりの小さな入江。さらにその西方に続くラングドックルシオンとか、ここは今後ひとつの象徴的な存在になると思つています。

自然型でいいですよ、マングローブがうっそうと繁っているマイアミのエバグレーズナショナルパークや東アフリカのンゴロンゴ・クレター、レークマニユアラ、セレンゲッティなど、一連の国立公園の水辺は原始自然を感じました。

川田 そういう熱帯の水辺都市という意味では、新しいところでは象牙海岸のアビジャンなんかいいです。熱帯林に囲まれてラグーン(潟)が、ずいぶん中の方まで入り込んでいて、それに接して台地があり、思い切ったデザインの高層建築が並んで水に影を落としている。

ヨーロッパでは、オランダのアムステルダムなどの運河の町。はね橋があつて小さな運河が通つていて、おとぎ話の国みたいですね。川との関係が違いますと、パリのセーヌ川なんていうのは全く人工的に飼ひ慣らされた感じですが、ロンドンのテムズ川とか、レングラーードのネバ川などは野性的な感じでそれなりに私は好きです。ネバ川はドストエフスキーの小説との結びつきもあるし、印象深いです。

あと、海岸の町できれいだと思つたのはチェニジアのカルタゴ。海がものすごくきれいですね。どうしてこんなに青いのかとエーゲ海めぐりの船長に聞いたことがありますが、塩分の濃度が高いからだつていうんです。それで光の反射で青く見える。カルタゴは町が白亜で、海の紺碧とコントラストがきれいですね。言い古されていますが、ベネチアももちろん好きですけど。

小林 私はベネチアでボートに乗っていたら、上から洗濯の水かけられました(笑)。彼らやるんです。生活の道です。こっちはいい気持ちでワイン飲んでましたから、それがいけなかったんでしよう(笑)。

ただ一般の家庭となりますと、現代の都市ではなかなかこのようなことはむずかしいと思います。デパートの園芸売り場へ行きますと、プラスチックの池みたいなものをいろいろ売っていますが、あれが売れる状況というのは、ある意味で象徴的だと思います。東京などの場合は、やはり公共の場に緑や水辺を求めざるをえません。もっと身近なところに水辺を求めるのであれば、住まいを郊外へ求めなければならぬ。そういう状況じゃないかと思ふんです。そういつてしまつておしまいますが、ただ可能性がないわけではありません。あのアルハンブラの庭園などを見ますと、小さな空間にきめ細やかに水をあしらつて、大変上手です。まだまだいろいろな使い方があんじゃないか、と思います。

高見澤 昔はたとえば手洗いに御影石が置いてあつて、水を引いているとか、京都の町家なんかでは水をうまく取り入れていますね。どこから流れてくるのかと思うと、住宅のなかをうまく通して流してあつたり。

日笠 住宅の庭に水を引き込むというのは相当古くからあるんじゃないですか。平安時代の寝殿造りにも釣殿がありますね。

小林 やはり神道との関係がありますから。庭のなかに技法として水を取り入れた最初の例は、数年前奈良で発掘されたもので、紀元七一年につくられた泉水・流山があります。これは中国から仏教と共に伝わってきたものですが、水とかかわりは、もっと古くからあつたと思います。というよりそれなくして稲作文化圏のこの国は存在しえない。

高見澤 いろいろお話が出ましたが、この辺で先生方に、世界の代表的な水辺というのを選んでいただいて、ご紹介いただきたいのですが、日笠先生いかがでしょうか。

思い出しましたが、イスタンブールも意外とよかったです。ボスボラス海峡の狭くなつていくあたり、ね。

日笠 シアトルもいいです。あそこには水上生活者がけつこういるんです。いかだの上に家を建てて住んでいる。交通はすべて船で行き来するわけです。

高見澤 それ、許されるんですか。

日笠 ええ。ガソリンスタンドがあつたり。交通調査もいかだに乗つて交通整理してました。また、水辺には高級住宅地が至るところにあります。家の前が芝生の庭で、その先が水辺で簡単な個人用の船着場がつくつてある。その土地の値段はものすごく高いわけですが、それにウォーターフロント、一フィートあたりいくら、というようにさらに土地代が加算されるのだそうです。考えてみれば、相当せいでいいですね。

高見澤 日本でも神戸の先の垂水とか明石には、海岸から自分の家の上つていけるような別荘がありましたね。

日笠 東京にはあまりそういうのはないですが、関西の方にはありますね。しかし、日本ではこれまで産業優先でどこへ行つても工場が水辺に張りついていますから、市民は水辺に近づけません。そこでこの前いつてたか、訴訟がありましたね。法律家はこれを入浜権というのだそうです。こんな問題も起こっているんですね。

高見澤 スウェーデンでは海辺をどこまでもまっすぐ歩いていけるように、政府が確保しているようですね。これからは、開発が進んでいく途中で、今おっしゃったような入浜権とか、景観を保存したり、市民が水辺を利用してきつような行政的な指導ということが必要になつてくるのでしようね。

市民の側の意識変革も必要

高見澤 先日、北九州市へまいりましたら、灰色のイメ

世界の代表的な水辺都市

日笠 他の要素も加わつて、水だけじゃないんですが、スウェーデンのストックホルムが好きですね。いくつもの小島からできているんですが、海水と淡水がぶつかり合うところなんです。あのフィヨルドがすばらしい。ほとんどの市民は町のなかではアパート住まいですが、少し離れた場所にサマーハウスを持つている。私もつれていつてもらつたことがあるんですが、フィヨルドの断崖の上にコテージがある。森のなかで、水を見ながら夏のあいだそこで暮らすわけです。あれはいいと思いました。都市計画でそういうことを許可するというのもいいですね。ストックホルムの市役所は名建築ですが、その前の広場は水辺に面して、すばらしい景観をつくり出している。とにかくストックホルムはいいです。

川田 私もストックホルムには思い出があるんです。学生時代にヘルシンキから、船で一晩かかってそこそフィヨルドの別荘地帯を見ながら行つたわけです。夏の白夜の頃でした。とても寂しい感じがするんです。で、明くる朝、ちょうど太陽がキラキラ輝き始める頃にストックホルムの港に入つた。朝日を浴びて市庁舎がそびえて、いかにも北の都にいたという感じで、胸がときめきました。

小林 ウォーター・フロントというのは自然型のもので人工型のもので大きく二つに分けられると思うのです。人工型からいいますと、まずバンクーバーですね。それからマイアミのローダーデル。新しく運河を掘りまして、運河に面して真っ白い平屋建ての住宅が並んでいます。オーストラリアのゴールドコーストにも計画的に運河を掘つて、運河沿いに住宅を配置していました。あとやはり、南フランスのニースからマルセイユに抜けるあ

ージだと聞かされていた街がとても美しいので驚きました。昔は市庁舎の前の川はとても汚かつたようですが、今は水もきれいになり、まわりには緑が植えられ、すっかり景観が変わつてしまつたそうです。各地でようやく水辺の確保が意識されるようになり、理解が進んでいることを心強く思いました。

いかがでしょうか。東京では水辺の埋め立てが進むようですが、水辺の確保と矛盾しないのでしょうか。

小林 昭和五六年二月に建設省は「豊かな河川環境づくり」を「治水」「利水」の主要な柱に加えて位置づけることになり、これを「河川環境元年」と呼ぶようになりました。

それまでは、たとえば降つた雨は側溝から準用河川、適用河川、直轄河川へ一直線に流して、いち早く海に出す、というのが基本的な姿勢でした。しかし、その考え方が大きく変わり、そうした治水、利水にもうひとつ環境づくりを加えようということになつたわけなんです。運河なども、これまでは単に埋めてしまふということでしたが、どうもそれはまちがいである、とかね。護岸についてもコンクリートで固めなくとも昔のままでもいいんじゃないか、ということがはじめに行政のレベルで議論されるようになってきたんです。これは大きな進歩ですね。

日笠 川にしても同じです。かつてはみんな川筋をまっすぐに改修して、それで生まれた土地を宅地や工場地として有効活用しようという発想が主でした。これからの考え方はそうじゃありません。川は蛇行していい、という発想に変わつてつあります。水も緑と同じように考えて土地はムダのようだが、蛇行している方がいいんです。時間をかけて流れればそれだけ水は地下に浸透しますね。

小林 東京湾のウォーター・フロントでも、象徴的なことがあつます。大井にしても二三号地にしても、土地を

つくるのがまず目的ですから、あの直立の鋼矢板をザ
ーッと打つわけです。そうしますと干潮帯がなくなりま
すからエアーレーションがゼロになって、水は浄化する力
を弱めます。それと景観上もよくありません。そこで東
京都の港湾局が思い切って鋼矢板を途中で切って、干潮
帯を人工的につくりました。ちょうど大井競馬場から羽
田寄りのところですが、あれはいい試みですね。そうし
ますと、いろんな生物が回復してきて、シギ、チドリなど
も来るようになりました。

高見澤 事情はだんだん好転しているんですね。

小林 といいますか、かみそり堤防にせよなんにせよ、
一時的な経済の急成長のときの、いわば過渡期における
現象だったというように好意的に理解しておきたいと思
っているんです。

高見澤 たた、水辺というところに危険だということが



④水路側に正面を向けたストックホルム市庁舎。⑤海岸のきれいな町、チ
ェニアのカルタゴ。⑥古い町、グリモー港(南仏)のウォーターフロント。



いわれますね。市民の側から川に柵をつくってくれとい
う要求が出されたり。ある人が子供が遊んでケガしたら
したていいじゃないか、という意見を出しておられまし
たが、つまり利用する側にもルールやマナーが必要にな
っていますね。

小林 そうです。せっかく行政の側も理解を示すようにな
ってきただけですから、市民の側も協力していかないと
うまくいきません。両者が一体となって、初めて水辺の
町づくりということもできるのだらうと思います。です
から、最近よくいわれますが、自然と野性の両面が水に
はあるわけです。どうも優しい穏やかな自然としての水
ばかりが議論されてしましますが、そのあたりのアンバ
ランスをどうやって埋めていくか、そのことを問う必要
があるでしょうね。現代人が忘れかけている野性とのつ
きあい方の作法も大切になっているんです。

高見澤 水のシビアな面も視野に入れた上で、水辺を都
市へ取り込んでいく道を探る、ということでしょうね。
川田 アフリカの人たちをみてみると水も含めて、自然
と論理的に対しているところがあります。というのもア
フリカにいますと自然の苛酷な面と直面しますからね。
ところが日本人のかかわり方は情緒的です。自然のなか
には情緒的にかかわりうる安全な雅な自然と、人間に害
をなすほうに恐ろしい荒ぶる自然があるというのが
私の持論なのですが、水辺のかかわりその二つの面を
おさえていくべきでしょうね。

高見澤 水辺とはある意味で、そうした自然性をもう一
度都市空間のなかへ呼び込むことだと思います。私たち
市民も柔軟に対応していかなければいけませんね。
今日は長い時間お話いただきまして、ありがとうございました。



⑦庭のさきには海がある高級住宅地(シアトル)。⑧計画的に運河を掘
り、運河沿いに住宅を配置したオーストラリアのゴールドコースト。

治水・利水・親水は矛盾しない

高橋 裕

治水と親水は成り立ちうるかどうかというより、両立
させなければいけない問題ではないでしょうか。そして
その方策は、充分にあると言えるでしょう。

治水・利水・親水の調和が基本

とかく従来のように、治水は治水、利水は利水、親水
は親水、といった風に別のカテゴリーにはつきり分けて
計画したのでは、なかなか両立しない。元来、それらは
渾然一体となっていたものなのです。むしろ仕事上の関
係とか、河川の工事などから便宜的に分けられていたの
です。分類した方がそれぞれの目的のためには都合も能
率も良いわけです。しかし、便宜上の要請は分かれます
が治水だけはうまくいった、しかし他の面では全然ダメ
だ、というのでは落第です。治水、利水、親水をどうい
う風に調和させるか、というのが川とのつきあい方の基
本になるわけです。

具体的には、たとえば治水という目的だけを考えれ
ば、堤防はできるだけ高い方が良くとか、できるだけ大
きいダムを作れば良いということになりますが、ある程
度以上の高い堤防は周辺の人々と川とを隔ててしまっ
て、親水という面からは具合が悪いといったようなこ
とです。それぞれの川によって相反する面がいろいろ出
てきますが、しばしば問題になるのが、堤防の上に木を
植えるのがふさわしいかどうか、ということです。現在
の河川行政では、基本的な姿勢としては、堤防の上に木
を植えてはならないのです。それは治水上の目的からで



調整池は、豪雨による洪水を防ぐため、護
岸の一部に設けた越流堤から水を池内に流
入させ、公園や住宅のビロティ(高床)部
分に貯留させるシステム。⑨：中野区妙正
寺川第一調整池周辺の地図。⑩：その空撮
写真。資料提供：東京都建設局河川部



すが、台風などの時には木がゆれて堤防の足元を弱め
る、というのです。堤防から離れて植えるのは良いので
すが、しかし木がないのも殺風景です。親水という面か
らは木が植えてあった方が良いでしょう。それに日本の
ような亜熱帯では、夏は木でもない堤防は熱くてしょ
うがない。木陰があれば景観的にも潤いがあるわけ
です。

ですから、私自身は木の問題も含めてケース・バイ・
ケースだと思います。どこもかしこもイカンというの
ではなくて、木の種類とか配置とかを考慮して、川によ
っては、あるいは場所によっては植えることが望ましいと
思う。原則があると、どうしても一律的に処理してしま
いがちです。場所場所によって違うということを考える
ことが本当の河川技術者の役目なのです。利水と治水は
しばしば対立しますが、それに親水の三つの関係の良い
意味での妥協点を見つけて、それにふさわしい計画を立
てるのが、これからの河川技術者の能力が問われる最
大の課題になると思います。

水害の多かった時代には、とにかく治水さえしつかり
していれば良かったわけです。二〇年前までは治水技
術が最優先で、親水などは場合によっては無視されたり
しました。一昔前にも、慧眼な技術者がいて、堤防の前
に水制(河川の水勢緩和・河身整正のために河岸から河
身に設ける工作物)を置いて釣人が渡れるようにしてい
たり、さまざまな工夫がなされているようですが、それ
でさえも霞が関に聞こえたら叱られてしまうといった状
況だったようです。

私は、川に近づいてくる人が親しめるように河川工事を行なうのが非常に大事だと思います。それは基本的には治水と対立しないと思います。というのも、堤防を高くするというようなことは際限のない話なのです。そういうハードな手段も大事だけれど、現在ではそれだけでは治水も利水も全うできなくなっている。ようするに地域住民との協力なくしては、治水技術も利水技術も完成しないのです。ただ、ゴミを捨てるなどか、土を持っていくなどか、禁止事項だけでは人々は川に親しめないでしょう。おのずからゴミを捨てなくなるようにしていくのが大事で、川をきれいに見えやすくしておけば、やがては自然にゴミを捨てなくなっていくのです。川の水質も汚い、堤防も草が茂って整備されていなくなれば、ゴミを捨てるなど、いって守ってもらえませんか。自然に川に親しめるような環境作りを行えば、人々は川を大事にします。

治水にしても、堤防を立派に作ったというだけでは完成しません。住民の協力が必要なのです。具体的に言うと、堤防が切れそうになった場合に水防活動——堤防に麻袋を積んだり、漏水を防いだり、そのほか特殊な水防工法などがあります——が行なわれますが、この水防の責任は、河川管理者ではなくて自治体なのです。水防法によって、各市町村には水防管理団体が地元住民で組織されていますが、最近その水防技術が衰えてきている。技術を高めるためには常に川に接していなければなりません。地元住民がやるものだ、ということがしばしば理解されていなくて、河川管理者の建設省や県の土木課の担当だと思っている住民が非常に多い。甚だしいのは自治体の長自身がご存知ないこともあります。ですから

すと、川には橋などない方が治水だけの上からは都合が良いのです。そこで洪水が起こるわけですから。とはいえ、橋が必要なことは当たり前ですから、いかに川に負担をかけないような橋を架けるかが目標になるんです。

川の表情にあった景観デザイン

一昔前まではともかく、最近では河川管理者が親水の重要性を認識し、住民の対応も非常に変わってきておりまして、この点で河川行政は大変進歩したと言って良いと思います。その辺の意図を河川景観をデザインする人にも理解して貰いたい。このころは、河川景観が重視されてきたのは結構ですが、どうも画一化しているような気がするのです。これもケース・バイ・ケースですけど、河川公園などでも、ただ整地をしてランコやスベリ台が置かれるだけです。むしろ川の個性に立ったあしらいが必要ではないでしょうか。もちろん、治水や利水に邪魔にならないような水辺を作ってほしいわけです。ということは、それぞれ川は表情が違いますし、その特性に合ったものであるべきなのです。そうすれば親水空間の設計は、治水、利水の妨げにもならず個性あるものとなっていくはずです。また最近の護岸には、かなりカラフルなものや化粧材までしたものがあり、決して悪いとは言いませんが、どこかで評判の良いものをすぐ真似する傾向は本当に川を理解して大事にする姿勢ではありません。

隅田川にもいくつか河川公園が設けられていますが、以前は堤防が高すぎて、評判が悪かった。堤防から降りることができて、水に触られるということが望ましいのです。大部分はまだ殺風景ですけど、やっとなんていう気運ができてきて、これからは川もきつと良くなっていくのじゃないでしょうか。桜橋の川辺りも階段で降りていけるようになりました。それから、永代橋から下流は

住民に堤防を守る義務があることを理解している人は少ないんじゃないでしょうか。昔から川の氾濫しやすい農村地帯の住民の水防技術は非常に高いものがありますし、その意識も高いです。堤防が危ない場合、都会ではすぐにヤジ馬が集まりますが、当人自身に防衛義務があるとは思っていません。昭和四九年に多摩川が氾濫しました。あの時もヤジ馬がいっぱいいたが、あの人の多くは堤防を守る義務があったのです。ヤジ馬全員が一袋でも麻袋を運んでいればあるいは決壊を防げたかもしれません。ところが、見ているかえって水防活動を邪魔しているばかりでした。イザという時には、地元住民の協力を必要とします。

行政側のPR不足という点もありますが、地元住民も日ごろから川に親しんで、しかも大事にするという習慣をつけていくことが必要です。そのためには、今盛んにもてはやされている水辺環境とか、親水空間とか、リバー・フロント計画とかいうのは、地元の人に川に親しんでもらって一緒に守って守っていく素地を養ううえから重要なものです。

ようするに、治水技術の進歩に伴って河川管理者にすべて任せきってしまえば良い、と思っている人が大変増えたようですが、そうではないんです。いくら立派なダムや堤防を作ろうと、それだけでは治水は完璧ではありません。水害というのは土地の利用仕方と密接に関係しあっていて、たとえば多摩ニュータウンなどのように大団地を作りますと、川の負担が非常に大きくなるのです。秩序ある開発なら良いのですが、乱開発が進みますと川の工事だけを完全にやっただけでも、流域の土地利用の仕方に影響を受けてしまうのです。土砂の堆積などもしっかりと処理しておきませんと、洪水の場合に流量の負担が大きくなりすぎて非常に危険になります。ですから、川との能力との関係で、過度の負担をかけないように

スーパー堤防にすることに決定したようですが、あの方であれば水辺の環境は良くなるでしょう。ひとつ良い所ができてくれば、みすばらしい箇所はみつともなくなるから、徐々に良くなります。

川に対するごんごん工夫

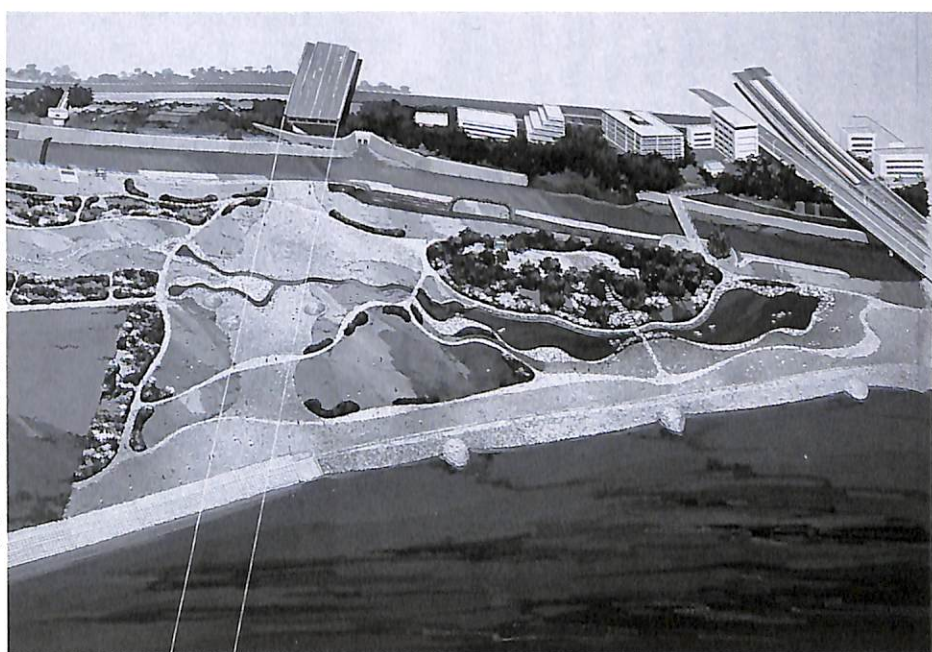
スーパー堤防というのは、堤防後方の宅地面を全面的に地上げして安全度を高めつつ新しい水辺空間をつくる事業です。都市開発事業が協力してくれたので、それが可能になりました。川の方だけではとてもできません。ですから、都市の水辺空間というのは、都市計画行政の方々に河川事業を理解してもらって、タイアップしなければできないのです。

調整池などでも、さまざまな試みがなされています。特に横浜の鶴見川などで意欲的ですが、いくつかの学校やテニスコート、地下駐車場とかは洪水時には水を溜めることになっています。

また、最近では多目的遊水池がいくつかあります。これもやはり、治水と親水の調和という発想から生まれたものです。多目的遊水池というのは、洪水調節と公園のセットが多い。全国ですべて二〇位あるでしょうか。青森市にある沖館川のものを見てきましたが、そこは洪水の時に学校の下に水を溜めるわけです。それから自動車教習所もありました。遊水池は治水目的と同時に、普段は公園にしておく、いわば治水と親水の協調を求めた姿です。

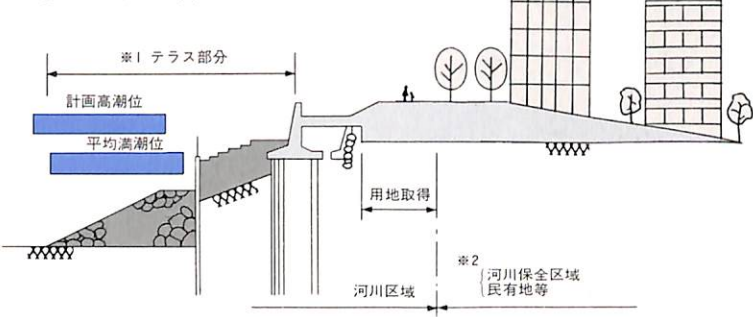
全国の都市で水辺空間をつくることに熱心になってきました。東京も盛んで、中野区の哲学堂の近くとか、世田谷区の二子玉川駅の近くの兵庫島のところなどです。かつては都市計画と河川行政もバラバラという状況でした。そして住民の方もすべておまかせという風でした。

適度な開発が望まれるのです。つまり、流域地区で川のことを考慮しない開発が行なわれるのは困るわけです。治水も全うできませんし、利水にしてもダムやセキの機能を十分に発揮できないわけです。極端なことを言いま



兵庫島河川公園の完成予想図。池や芝生などの広場をつくり、親水性の高いレクリエーションの場として多摩川流域の住民が利用できるように、建設省と世田谷区が整備を行っている。また野川の水を瞬間浄化によって浄化する、全国で初めての施設が設置されているところでもある。資料提供：建設省京浜工事事務所

スーパー堤防は、洪水対策と河川周辺の過密住宅再開発を兼ね備えた設備。通常の護岸の内側を盛り土でかさ上げして高層住宅を建て、堤防の決壊を防ごうというもの。①はその断面図。資料提供：東京都建設局河川部



- ※1 緩傾斜型及びスーパー堤防の促進と水辺の早期開放を図るために先行的にテラス整備事業として実施していく部分。
- ※2 河川保全区域……河川法に基づく河川管理施設を保全するための区域。

最近ようやく、都市計画行政の方々の協力を得て、スーパー堤防のようなものができあがりますので、住民にも協力する気運が高まっているのじゃないでしょうか。ただ、先程も指摘しましたが、ちよつとはやりになってしまった真実的なものが多くなる傾向も見えますが、一時の話題だけに終わってしまわないために、基本的な川と住民との関わり合いに立ち返って、治水、利水、親水は矛盾しない、という哲学のもとに進めてもらわないと、流行で終わってしまう恐れも感じます。各々の河川の個性に適した景観作りをしていくことが一番重要なことではないでしょうか。

(たかはし・ゆたか 芝浦工業大学教授)

水——ボイドな空間

上田 篤



水網都市大阪の象徴的存在、中之島公園。写真提供：森田敏隆 世界文化フォト

水網都市ということの問題にする場合、まず都市がいつたい何であるかを語らなければなりません。私が思うに、それは何もないカラッポな空間であることが理想なのです。昔日本には「鎮守の森」という聖域が存在していました。ここでは天変地異や不作など困ったことが起きた時、あるいは村の約束事を取り決める時に、村人が集まっていろいろと相談をする。人間と人間のコミュニケーション、つまり情報の場だった。ですからそこは何もない空間であることが必要なのです。そうやってだんだん情報が集まりはじめますと、そこに住もうという人が増えてくる。現在のようには情報が価値を持つ時代だとなおさらで、都市に近く住んでいる人間ほど情報を多く得ることができる。だから今、東京はますます人が集まってきているし、地価も上がっています。けれども

そうすることによって都市の持っていた何もないスペース、ボイド（カラッポ）なスペースというのが、だんだん侵食されているわけです。

水路は情報空間

ではこのボイドなスペースとはいったい何なのか。カラッポとか「何もない」とか言うとか何か価値のないもののように思うかもしれませんが、これが大変値打ちがあるのです。たとえば街路、これは昔はボイドなスペースだった。パブリックなものだから、私有化できない。すると当然建物も建たないから、そこには広々とした何もない空間ができます。ここで人々は話をしたり、物を売り買いしたりする。つまりボイドなスペースというの

は、一種の情報交換の場としての機能を果たしていたわけです。

しかしその街路には、今や個人の家の延長とも言える自動車が行き交い走りまわっています。それが都市が本来持っていた情報伝達の能力を弱めているのです。ヨーロッパなら公園や広場がその役割を代替していますが、日本にはそういったものがあまりない。あえて情報性という面でみれば、街路よりはむしろ盛り場にその機能があると言えます。しかし、盛り場というのは確かにコミュニケーションが可能なお場所ではあるけれども、物理的には決してボイドな空間ではない。だから私は街路に代わるボイドなスペースとして水路を挙げているわけです。川には壁がありませんから川岸に立てば向こう岸の家が見える、町の繁盛ぶりがわかる。遮るものがないから

ろんなことが歴然とわかってくる。そう考えると水路というのは立派な情報空間だと思うのです。私が水網都市を主張するのは、第一にその辺の理由があるからです。

迷路都市にはカラッポ空間が必要

それとうひとつ大切なことがあります。それは現在の都市がラビンス(迷路)化していることです。かつて城壁を持たない日本の城下町が、外敵の侵入を防ぐため町全体を迷路状にして防衛の砦としたことはよく知られています。そして異形の建築が勝手気ままに建ち並ぶ今の都市の様相もそれと大差ないのです。そこに住んでいる人間にとってはきわめて親しみ深い空間となり、そこを訪れる人間にとっては迷路となる。まさに現在の都市は、ラビンス化している。けれどもそれはそれで良いのです。整然とした秩序正しい状態にする必要は何もない。ただひとつ問題があるとすれば、そこには迷宮を解き明かす存在がないことです。ギリシア神話では、ラビュリントスに入れられたテーセウスが恋人のアリアドネにもらった一本の糸に助けられ、迷宮を切りぬけたという話があります。都市がラビンスであるならば、当然このアリアドネの糸が必要になってくる。それが、全体に見通しがきくボイドな空間なのです。以前は街路がその役割を果たしていたのですが、先に言ったように現在の状態ではそれもままならない。都市を見通すうえで街路はダメだとすると、次に考えられるボイドな空間は水路なのです。たとえば現実問題でいうと、地震や火災なんか起きた時にどこへ逃げても見通しのきかない袋小路では、それだけ混乱が大きくなります。その場合、

人間は本能的に水のあるところへ行く。

水網都市へ変える二つの可能性

とりあえずは、この二つのことが水網都市を提案する理由ですが、もっと根本的に考えればそれは自然だということ。自然というものは三つのものがあると思うのです。第一は生物的自然。鳥とか花、生きている自然。第二は非生物的自然。鉱物とか、川の流れとか、海、空、星……。そして第三は文化的自然です。人間がつくった建造物、城下町のような風景的なもの。芸術といつてもいいかもしれない。これらの三つの自然というのは、誰が見てもいいと思うわけです。人間にはやはりそういうものがなきゃならないと思います。ただ第一と第二の自然については、保護対策も行なわれていますが、第二の自然はまだこれからという感があります。それを今から始めなくてはならない。そこからも水網都市という発想が生じるわけです。

だからといって、今ある都市をすぐに水網都市にできるかというそうではない。確かにかつて東京も大阪も水都であったかもしれない。でも堀や小川はおおかた埋めつくされてしまったから、今さら道路を掘ってやろうなんて不可能なことです。そこで今、可能性があるとしたら二つしかない。ひとつは大都市の持っている臨海工業地帯、ここから工場がどんどん逃げ出している。アメリカや東南アジアに日本の工場が建つ時代なんです。工場がなくなっても当然なわけです。ここにはまだ運河が残っているのですが、これが今企業や行政に狙われている。たとえば運河の上に高速道路をつくらうというの

です。それが決まる前に手を打って、この運河をできるだけ保存すればいいと思うのです。

もうひとつの可能性は、これから埋め立てられる土地です。たぶん今後も埋め立ては続くでしょう。なぜかというと、住宅は建てたいが地価の問題があつてできない。となると結局埋め立てるしかない。埋め立てるのは結構だけれど、その後のこともちゃんと考えてほしいわけです。大阪の南港や神戸のポートアイランドを見ればわかると思いますが、ウォーターフロントという感じがまるでしない。海に來たからといって、海の景色を眺めようなどと思えないのです。ですから私は南仏のニースやベネチアを見習ったらいと思ふのです。ニースもベネチアも各家がみんな海に面している。こういうウォーターフロントに住宅地をつくるのが本当なんじゃないでしょうか。現実問題として、すべての家が海に面するというのは難しいとしたら、住宅地のなか、街のなかに運河を通したらい。そうすればどの家も朝夕海を眺められるし、家の下にヨットを置いてそこからサツとマリンスポーツをやることもできます。

しかし、こういう御託をいくら並べても空しいという気がします。今流行だからウォーターフロントをやっているであつて、流行が過ぎたらまた別のことをやるんじゃないですか。日本の社会というのは何か言うと全部がそうならなきゃいけないみたいな気がするらしく一斉に流行になる。私はそれが余り好きではありません。大阪が水網都市だからといって、東京も名古屋もそうなる必要はない。都市にはそれぞれ個性があるわけですから、何もそれを殺してまで同じになることはないのです。談

(うへだ・あつし 京都精華大学教授)

アメリカに見る

ウォーターフロント再開発による都市活性化

川端直志

欧米でウォーターフロントの再開発が行なわれるようになってきたのは、一九五〇年代からです。それがピークに達したのが、一九七〇年代で、それが現在まで引き続けている、と考えていいでしょう。

港の機能の変化と都市の衰退

ではなぜウォーターフロントの再開発ということが言われ出したのでしょうか。

その大きな原因のひとつに、港湾物流の変化があります。かつては港湾物流というバラ荷型でした。それが次第にコンテナ化してきたわけです。コンテナというのはご存知のように、物資を大量かつ機械的に運ぶことを目的に生まれてきたものです。コンテナにすると積み込み・積み下ろしは二時間ぐらいでできてしまい、旧来のバラ荷型と比較すると大変速い。

このコンテナ化という港湾物流の技術革新が、港の機能を変えてしまうのです。バラ荷型の場合は、港湾もそれにふさわしいようないわゆるフィンガー型とよばれる埠頭(かど)になっている。手の指を想像していただければ分る

ように、港湾が指を開いたような形をしている。ところが、コンテナの場合は、フィンガー型では使いづらいです。コンテナ船というのはコンテナを大量に運びますから、そのためにはコンテナを積み上げておくバックヤードが必要です。バックヤードが広くとってないとコンテナ埠頭として機能しないのです。

そこでフィンガー型を埋めて、スクウェアなエリアに変えようという発想が出てくる。ただ、コンテナ船というのは大型ですから、水深を深くしなければならぬので、そのためには浚渫(くわんせつ)も必要になってきます。それならばいっそのこと沖合の水深の深いところに沖合人工島をつくった方がいいということになる。その結果、港湾機能は港の内側から、港の外側へ出ていくわけです。

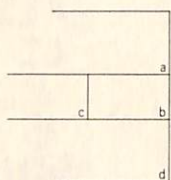
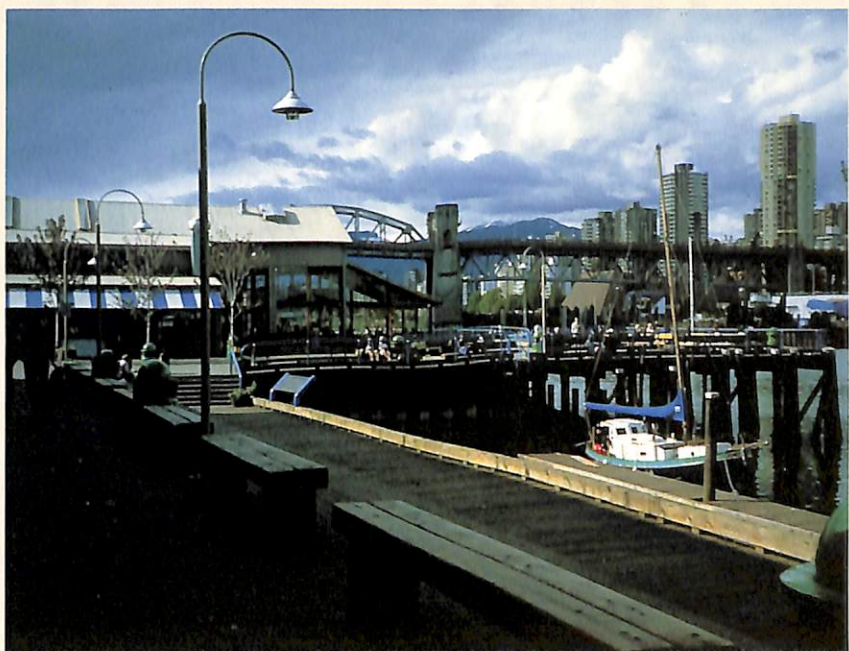
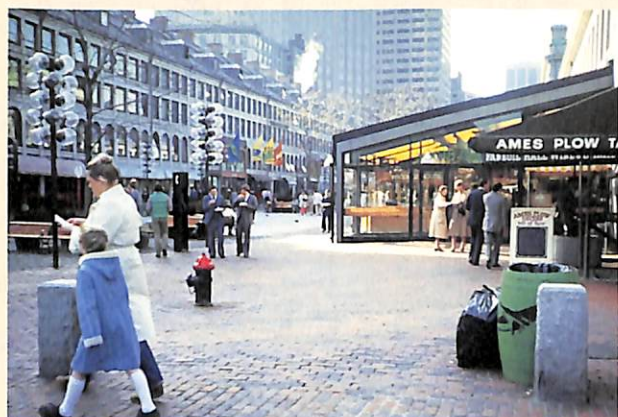
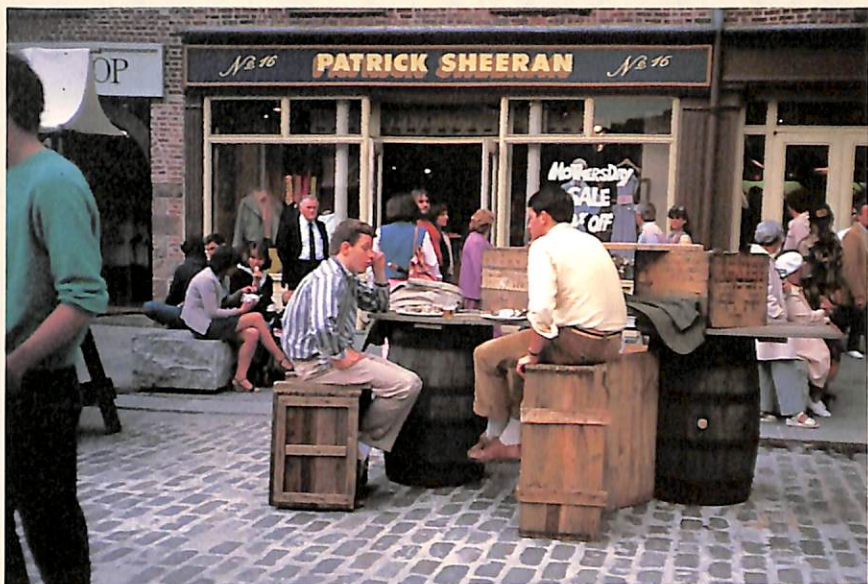
このようにコンテナ化が進むことによって港湾構造が、フィンガー型を主体とするインナーハーバーから、沖合人工島などによるアウトハーバーへ大きく変わり始めた。そうすると、もうひとつ大きな変化が生じる。港湾の背後には必ず港湾都市があるのですが、港湾の物流のポテンシャルの低下によって、港湾都市も荒廃していくわけです。つまりインナーハーバーとインナーシティと

が、両方とも都市機能を低下していくという経緯があつた。これは日本でもみられることですが、アメリカでも同じで、まず最初に夜間人口が逃げ出す。そのあとを追って商業が出ていく。そして最後に業務が出ていってしまう。たとえば金融といった本格的な業務まで逃げ出してしまふわけです。

このようにインナーシティ問題がいたるところで起こり始め、アメリカの都市を非常に疲弊させていく。これはいわゆる経済の空洞化という現象と関係する問題で、アメリカでは早くからそうしたことが顕在化していたのです。

ウォーターフロント再開発というのは、どちらかというと明るい面からとらえられがちですが、こうした経済の空洞化、あるいはソフト化と言われている問題が背後にはあるということもおさえておく必要があるだろうと思います。

ウォーターフロントの再開発は、今言ったような大きく二つの要因が重なりあつたところに出てきたと考えてもらえばいいでしょう。すなわちその契機はそれぞれ違つてはいませんが、基本的には、荒廃したインナーハーバ



- a. フルトン魚市場移転の跡地を含めた歴史的港湾の再開発。ニューヨークのサウスストリート・シーポートミュージアム。
- b. クイーンメリー号とワールドビューズの飛行艇をバッドファーゾーン（緩衝帯）に使用し、景観を妨げる工場をかくしてしまった。カリフォルニア州ロングビーチ。
- c. 歴史的なホールと市場を保存再生し、ウォーターフロント再生を実現した記念碑的プロジェクト。マサチューセッツ州ボストンのファニキュル・ホール・マーケットプレイス。
- d. 旧工場施設群を再生し、水辺にショッピングセンター、劇場、市場などをつくった。カナダ・バンクーバーのグランビルアイランド。



- e. 文化インセンティブとしての水族館が水辺へ市民を引きつける。メリーランド州・バルチモアのインナーハーバーと水族館。
- f. ウォーターフロントの環境と利便性をめぐって、ポート・オーソリティ、ベイ・コミッション、市民の間で大論争があった。カリフォルニア州サンフランシスコのピア39。
- g. 遊歩道が都心部から河岸沿いに連続し、オアシス空間をつくり出す。テキサス州サンアントニオのリバーウォーク（河岸遊歩道）。

在来の水際線の魅力

そこでもう一度旧来のウォーターフロントというものを直視してみると、環境的に非常に魅力的な要素をもっているのです。たとえばフィンガー型の埠頭はコンテナ

ーとインナーシティを再活性化させようということがひとつの動機になっている、というわけです。

には不都合ですが、逆に物流から切り離してみるといい面がいろいろある。その最大の特徴というのは水に接する長さ、水際線延長と言いますが、これが非常に長い。コンテナ用のスクウェアなものと比較すると較べられないくらい長いわけです。これは見方を変えたと新しい資源になりえる。現在のウォーターフロント開発の最も中心になる哲学は、オープン・トウ・パブリックという考え方で、つまり水辺を市民に開放することです。その意味

から言うと、水際線が長いということは大変なメリットになる。フィンガー型というのはオープン・トウ・パブリックという原則に非常に適している環境なのです。私は、ウォーターフロントを産業的なインフラストラクチャーとして見るのではなくて、むしろ社会的文化的インフラストラクチャーと見たいのですが、そういうあらたな自然環境としてとらえ直すことができると思うのです。それがウォーターフロント見直しの第一点ですが、第

二点、インナーハーバーとかインナーシティというところは歴史的遺物がたくさん残っている、その保存と結びついたこと。港湾が栄えた一九世紀というのは、アメリカにとって世界を席巻する基礎をつくった時代です。当時の歴史的な環境がたとえばボストンなどの港町には残っている。そうした歴史的な環境を見直そうという運動とまっく呼吸したわけです。しかも、こうした気運がアメリカの建国二〇〇年祭と合致した。実際に建国二〇〇年祭の事業で、ヒストリカル・コンサベーション・グランツという補助金が出て、これがウォーターフロントの保存的再開発に大変役立ったのです。

第三点は、第二点とも係わるのですが、インナーハーバー・インナーシティに商業施設を呼び戻す方法として、歴史的環境を使ったこと。これには、アメリカのデベロッパで「ウォーターフロントの魔術師」とよばれるラウスという人間が大変大きな役割を果たしたのですが、その戦略というのは、商業施設に文化的要素を組み合わせることで、もう一度インナーハーバー・インナーシティに人を集めようというものでした。つまり、アメニティ要素のない商業施設はダメだ、という発想に立った上で、インナーハーバー・インナーシティの歴史的環境をその舞台づくりの演出効果として再利用しようとしたのです。そう考えてみると、インナーハーバー・インナーシティというのは商業環境の宝庫になりうるわけ。しかも幸いなことに、アメリカでは衰退した場所というのは地代がガクッと下がる。アメリカのデベロッパというのは、日本とちがって、より安い土地を買って、付加価値を高めることによってもうけるのです。だから、彼らは「安い土地」に対して非常に興味を示す。つまり、安いところを買って、再活性化できれば、彼らにとっても利益となるわけですが、同時にそれがデベロッパの役割である、と心得ているわけです。

複合型開発

とくに、複合型の施設をつくって、多様性をもたせようとした開発が流行っています。ウォーターフロントではありませんが、ボストンのコブレイスクエアなどもその代表例でしょう。ウォーターフロント開発ではその施設の幅もうんと広がり、ホテルがあつてショッピングセンターがあつて、市民施設もあるというように、ウォーターフロントを舞台にしてさまざまな要素を組み合わせたものとして、バンクーバーのカナダ・ハーバー・プレイスはその典例で、万博を契機に再開発が行なわれたのですが、あそこは、アラスカ航路の拠点にもなっている。まさに複合型です。

コンベンションセンターがあり、またメッセ（見本市）があり、業務用の事務所ビルがあり、ホテルがありショッピングセンターがありと、さまざまな機能が複合化された、と言ったわけですが、考えてみると埠頭という場所とは元来そういう場所だったのです。いろんな意味で結節点機能をもっていたところが、ウォーターフロントなのです。

ボストンのフィッシュ・ピアというのは、情報と物流を同時にコントロールする結節点としての機能を生かしたウォーターフロント再開発の典例です。ここで注意しておきたいことは、アメリカの場合、港湾局というと同時に空港も管理している場合があるのです。ボストンというマサチューセッツ・ポート・オーソリティというのが港湾もローガン空港も管理している。しかも収入の八割は空港からだといわれています。ニューヨーク・ニュージャージー・ポート・オーソリティは、港、空港の他に高層ビルや高速道路、橋、さらには地下鉄まで持っている。

そういうこともあつて、結節点機能を重視するような

今あげた三点がウォーターフロントを見直し、そこを再開発しようという基本的な要因になっていると思います。さて、では具体的にはどのように進んでいるのでしょうか。

歴史保存型の開発

まず歴史的保存という点でいうと、アメリカ・テキサス州のサンアントニオ川のリバーウォーク（河岸遊歩道）が典型的な例です。サンアントニオという街はもとともスペイン系の宣教師たちがつくったミッションから発展してきました。そこを流れるサンアントニオ川というのは大変な暴れ川で、後に入ったアングロサクソン系の連中から暗渠にしようという計画が出される。メキシコ系の連中はこれに真っ向から反対して、この川を公園として再開発しようと言いつたのですが、その論争がなんと二〇世紀の初頭から三〇年代まで続きます。ようやく一九六〇年代に川の保存事業がスタートして、今やすばらしいリバーウォークになった。この大きな特徴はアーバン・デザインのカイドラインを決めて、初期サンアントニオ様式という個々にオリジナルな様式に基づくよう定められている点です。

保存という点でいうと、消極的な意味にとらえがちですが、本来都市の保存事業というのは、その都市がもっている本質とは何かを探り出すことでもあるわけですから、サンアントニオのようにそれを積極的に現代風に翻訳し直すということは、重要な点だろうと思います。

文化施設型開発

ウォーターフロントに、オペラハウスをつくって世界ウォーターフロントの再開発に熱心に取り組めるし、それを支える経営的バックボーンもしっかりしているのです。

それはともかくとしても、何かと何かをリンクさせる場所という発想、またそういう場所として、ウォーターフロントをしつかり位置づけることは、今後の再開発にとって大事なことになるだろうと思います。

ウォーターフロント開発は都市戦略

アメリカではウォーターフロント開発を都市戦略として考えているところがあります。サンフランシスコ・ポートがそうで、あそこは南北に細長いフィンガータイプの埠頭のある港ですが、中央にフェリー・ビルという歴史的建物があることで、その南北の性格をはっきり分けて位置づけているのです。有名なピア39のある北側はすべてピアの番号が奇数番号で商業開発地域なのです。南側は偶数番号で港湾物流オンリー。そして収入を支えているのはじつはフィッシューマンズワーフの土地のリース料なのです。しかも商業施設の方は、契約制で、なんとロイヤリティ・フィーをとっているのです。で、そのフィーを次の開発のためにストックする。じつにしっかりと方法で経営しているわけです。

ウォーターフロント再開発にとって、やはりその主体がどこのかということは非常に大事な点だと思いがすが、サンフランシスコの例はその意味で大変参考になる。やはり人々を集めることは、市民のニーズに合致したものでなければならぬわけですから、商業的にも成功することがまず大切なことです。

最後に付け加えておきたいのは、ウォーターフロント再開発のチェック・アンド・バランスということですが、サンフランシスコがやはりそうなのですが、開発を推進

的に有名になったのがオーストラリアのシドニーです。この方法はアメリカ各地でよく使われているものと同じです。この典例が、アメリカ・メリーランド州のバルチモアのインナーハーバーの再開発です。

私は、文化的な施設を開発の誘導策にする方法を文化インセンティブとよんでいます。この水族館は、その建物と展示方法といい、まるでコンテンツボラリーアート・センターといったほうがいいほどユニークなものです。てっぺんにガラスのトンがり帽子みたいなものがついていて、水族館自体がランドマークにもなっている。展示のしかたはおおよそ型破りで、一部の水族館の学者には評判がよいかもしれませんが、そのかわり市民には大変歓迎された。しかも、バルチモアの賢いところは、それを埠頭の先につくったことです。それを見に行くため市民は先づばまで行く。必然的にウォーターフロント全体に回遊性が生まれるわけです。

カナダのバンクーバーもそれをやった。工場の跡地利用ですが、工場を保存しながら内部をショッピングセンターに変えて、また小劇場を併設させた。劇場というのは、たいがい夜始まる。芝居が終わったあとお客は食事をするわけです。そのためここは二四時間型の都市になった。そういう意味では劇場は、まさにインセンティブなのです。

コンベンションセンターというのも文化的インセンティブになりうるものです。先ほど言ったサンアントニオにもありますが、あそこが目玉はじつはプロレスの興業だそうなんです。

コンベンションセンターに代表されるような多様な活動が展開できるスペースをウォーターフロントの再開発にもつてくるというのは、今のひとつの特色になっています。

するポート・オーソリティが徹底した開発をやる一方で、通称サンフランシスコ・ベイ・コミッション（正式にはサンフランシスコ湾保存開発委員会）という団体がしつかりそれをチェックする機能をもっていることです。州法に基づいて創られた団体ですがメンバーの多くはエコロジスト（人間を生態系の要素として位置づけ、生態系全体を保護しようという運動家）であり、サンフランシスコ湾の水深線から一定距離（約五〇〇m以内）における開発一切は、この許可を受けなければならないと法律で定められています。そういうことがあるために、開発にあたっては常に激しく両者が議論しあうわけですが、結果的にいい開発ができるのです。もうひとつ財源問題からみるとカリフォルニアにはすごい法律があります。沿岸管理法で、その第三章にはタイドエリア（カリフォルニア港湾局の管理する海からオイルが出た場合は、すべてその利益は沿岸地域の市民利用施設に還元せよ、と明示されています。それでマリナをつくったり、遊歩道をつくったりしています。ロングビーチでは、沖で吹きあげるオイルのヤグラをかくすために、ヤシを植えて修景とする財源にしたほどです。

ウォーターフロントの再開発にとって最も重要なのは、最初に言ったとおり、オープン・トウ・パブリックです。どんなにいい水辺であっても市民に開放されていなければ意味のないものです。あくまでも市民のニーズと合ったかたちで進まない限り、ウォーターフロント再開発という意味もないわけです。チェック・アンド・バランスということとは、その点で今後のウォーターフロント再開発を考えていく上で、ぜひとも考慮しなければいけないことだ、と思います。

（か）わばた・なおし 株式会社地域研究所
ケイ・プランナーズ代表取締役所長

たった一滴の水の雫——その音があたりの空気を一変させる程の力を持つことがある。

一条の光にも似た雫の落下と、それに続く波紋の広がりは、私達の心の中にも深い安らぎをもたらすイメージを持っている。

水の形態の様々、雨、河の流れ、泉や滝、そして海などは、多くの創造者達の手によって、絵画や音楽の主題に取り上げられ、表現の対象となってきた。また、文学に於いても古代ギリシアの神話的時代から、最も重要な象徴的意味を持つ存在として語られている。

こうしたことは、水のイメージ（不定型、無秩序、純化、永続性等）が、普遍的に人の中に記憶されているからなのだ。だから、水は単に直接的な言葉以上のものを内包していると言える。

音の世界に於いて、水は全可聴スペクトルをもつ、自然界の中で恐らく唯一の素材だろう。嵐の海は、混沌と力を象徴する全周波数にわたるホワイトノイズ。低周波から高周波まで含む、強大な音響エネルギーとして記憶される。雨音や川のせせらぎは、連続する点がリズムを呼び起こし、規則性を有する時間が生まれる。そして、一滴の雫は嵐の後の平和、浄化、生命の復活の象徴。楔形波形のアタックと減衰、それに続く波紋の輪が、さらに全体性と完全性を加えるのである。

さて、これらの音は実際には自然環境の中で聴かれる「音風景」であり、音楽として屋内で演奏され、聴かれる音とは区別される。

水の創造力

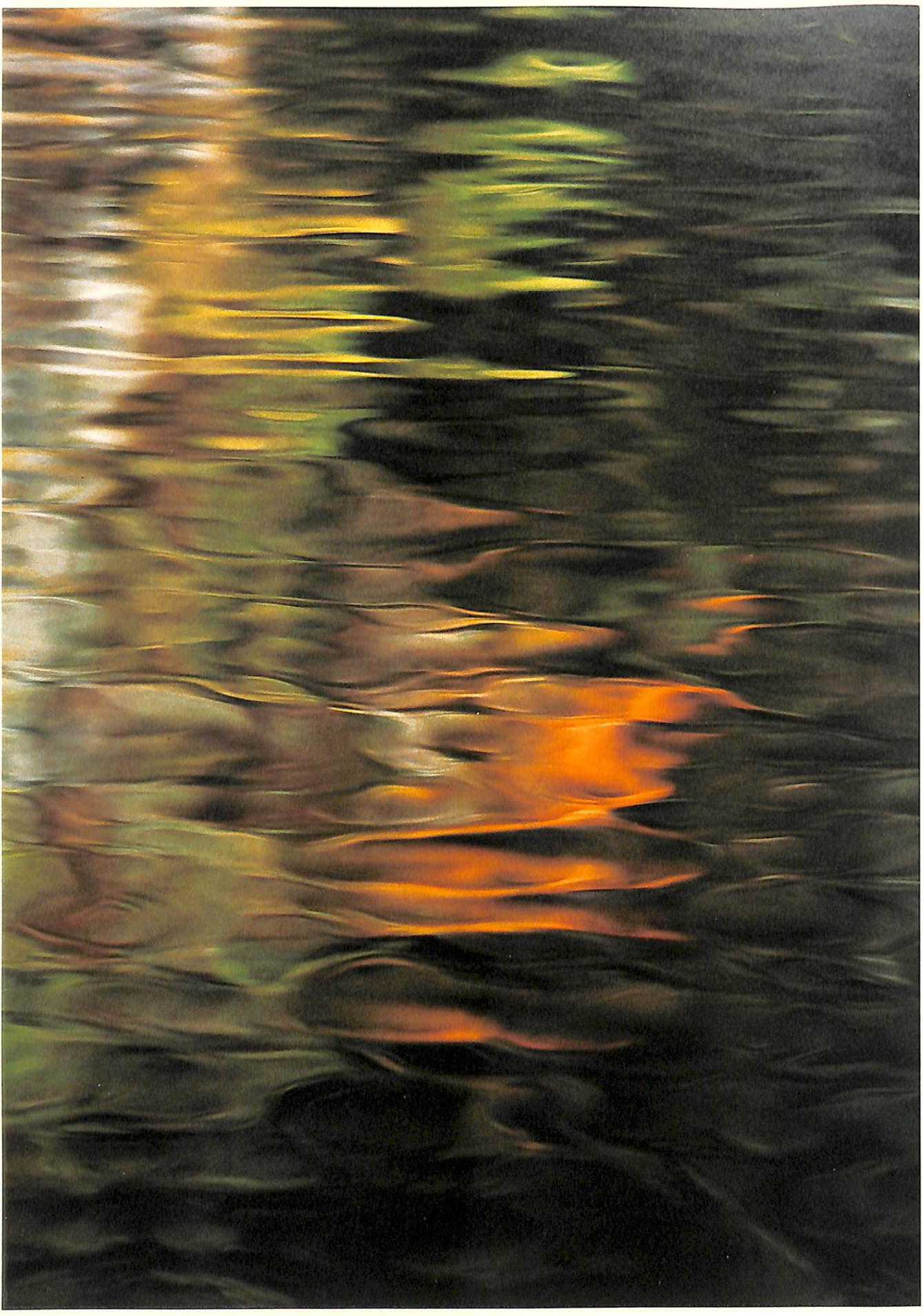
高田みどり

水の象徴性を導入した音楽は、いわば環境の模倣である。水の形態を標題音楽にした例は多いが、水の文化の土着性（たとえば日本の鹿威しの音と西洋型噴水の音の違い）を超えて、人はコンサートホールに居ながらにして神話の海へ繰り出したり、未知の森の泉のほとりに、たずむことができる。

現代では、描写としてでなく、実際に水が音素材として音楽に取り込まれることも多く、私自身、水滴がランダムに落ちる装置を作って録音したり（サンプリング・マシンの水滴音より非周期なリズムが得られる）、水槽にベルを浮かべて余韻を揺らすこと等もある。バケツの水に椰子の実を浮かべて叩いて音をだすウォーター・ガード（Water Guard）等、古くからラテン・アメリカで使われた楽器もある。

いずれにしろ、都市の音環境の変化に伴い、現代人はますます自然の水音から遠ざかっていく。いつか水のもつ様々な神話も、人の記憶の中のロマンとしてのみ語られる時代が来るのだろうか。遠い未来、水が私たちに伝えるイメージは、どのようなものか、興味のあるところではある。

（たかだ・みどり 音楽家）



都市の水辺空間のデザイン

鈴木信宏

もし今「水辺とはどんなところか？」と尋ねられたら、おそらく大半の人が海、川、そして湖など、自然のなかの水辺を答えるだろうと思います。なぜならほとんどの人が、人工的なものに対しては、水辺だという意識を持っていないからです。確かに人間の発想としてはそれが当たり前だし、水に親しむということを考えてもその方が自然の姿だといえます。

ところが、そこに都市という問題を投げてやるとかなり事情が違ってきます。一時より良い状態になったとはいえ、現在の都市河川の多くは親水河川と呼ぶにはまだまぼろしに近いものばかりですから、私はもう少し人工的な水空間に注目してもいいんじゃないかと思うのです。たとえ人工的につくられたものであったとしても、なかには自然の水空間よりよほど私たちに親しみと快適さを与えてくれる場合もあります。とくに最近ではつくり手側が、どうすれば水の魅力的な表情がでせるかということを考え、水の性質をうまく生かした空間をつくりだすように工夫しているのが、都市景観を潤す水がますます増えてきているのです。

水の表情を活かす

これらの人工的な水景施設のなかには、初めの短期間でけ水が流され、その後はずっと止められてしまった例も少なくありません。つくる時はみんな張りきって景気がいいのだけれど、いざできあがってみると思った以上に維持管理費がかかる。こんなにお金がかかるなら止めてしまえとなるわけです。だから何でもかんでもつくればいいというわけではなく、お金という現実問題を事前に考えておかねばならないのです。

けれどもなかには、年間三〇〇〇万円以上の維持管理費をかけても止めずに頑張っている例もあります。アメ

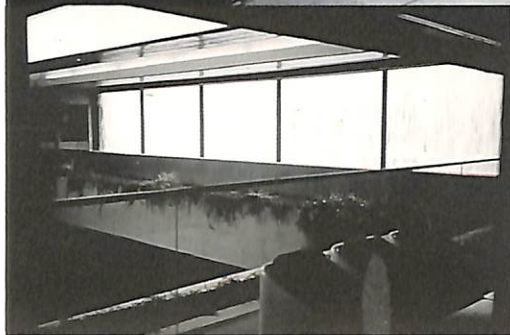
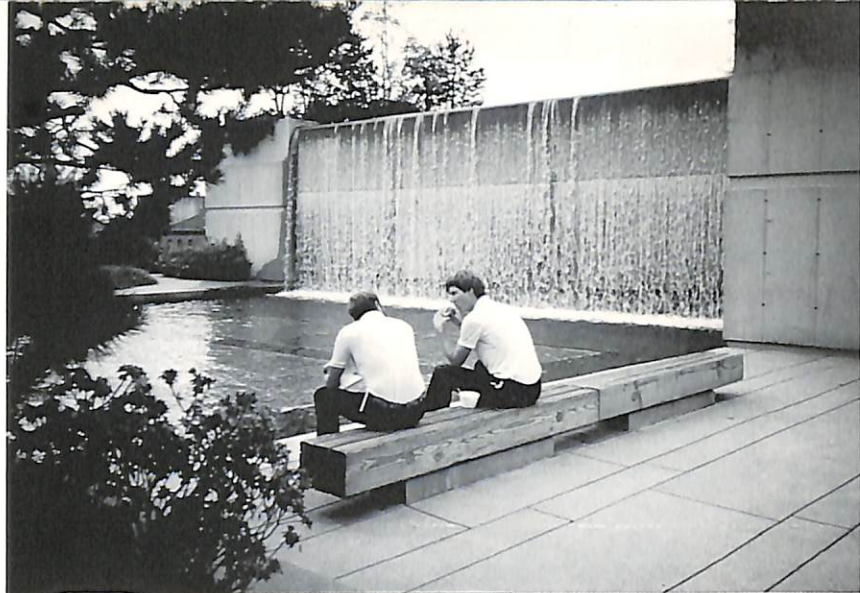
そして乾燥したアメリカ南部に住む人々が、水のありがたさをよく分かっていた。つまり水とは、天からタダで授かるものだとは思っていないせいなのです。ですからどんなにお金をかけても、それだけの心理的効果が得られるのなら、大いにやってみようと考えているのです。

これはある意味では大都市の河川のプロトタイプ（原型あるいは模範）だという気がします。基本的には自然の

循環のなかの水を利用してできれば一番いいに決まっているけれど、都市においてはそれはとても難しい。だったら多少お金をかけても、人工的であっても、水空間をつくらうという話にどうしてもなるんじゃないでしょうか。

けれども先ほどお話ししたように、ただつくればいいというものでもない。そこには人が安らぎを得るような心理的効果が介在していなければ、単なるムダ使いに終わってしまう。それでは心理的効果を勝ちうるものとは、どんな水空間なのか。私が考える優れた水空間とは、水の持つ性質、表情を充分に見せる工夫がなされたものです。たとえば流れる、落ちる、溢れる……これらの性質をどれだけ魅力的に演出できるかという一点にかかっていると思います。

眺め聴く水と触れ遊ぶ水



建物のガラスの屋根、ガラスの壁に水を流すという手法を取り入れたバンクーバーにある州のオフィスビル

上：外観 下：内部から見たもの

水量、規模ともに壮大なテキサス州のウォーター・ガーデン。



リカ南部のテキサス州フォートワース市にあるウォーター・ガーデンには、直径五〇メートルほどのすり鉢状の谷底に向かって大量の水が流れ落ちる巨大な滝がつけられています。ここでは昼の二時から夜一〇時まで、毎分一万五〇〇ガロンの水を循環させているというから、電気代と水道代だけでもかなりの額のお金がかかる。それでも竣工以来、一度も止められることなく、流し続けられてきたのは、市民にとってこの水空間が殺風景な都市環境に潤いを与えてくれる大切な空間であったからです。

水の表情が生きたデザインをしていることと、水との触れあいを考えることといえば、ニューヨークのペイリー・パークとオレゴンのラブリジョイ・プラザは、あらゆる水空間のお手本といえます。

前者は、CBSの会長ウィリアム・ペイリーが、元ナイトクラブだった土地を買いてつくった公園です。このなかには高さ六メートルの滝があつて、この滝を眺められるようにすぐ目の前がテラスになっています。これだけなら、どこにでもある人工滝と変わりがないのですが、この素晴らしいのは人が椅子に腰かけた時の視線がちょうど滝が下に落ちて砕ける位置にくるように水面をちよつと持ち上げている、そういう工夫をしているところなのです。また滝の水しぶきの冷たさと、大都会マンハッタンの騒音をかき消す水音は、人々によりいっそうの安らぎを与えています。

ペイリー・パークが「眺め、聴く」空間であるとすれば、後者のラブリジョイ・プラザは「直に触れる」水空間です。滝を階段状につくり、このなかに人が踏み込んで流れ落ちてくる水に向かってジャブジャブと遊ぶことができるのです。人工的なコンクリートを使って、それとは対比的な水という自然を感じさせるデザインをしているのもさることながら、人と水との直接的な触れあいを意図してつくられた初の例として、これは歴史上画期的な水空間といえます。

このラブリジョイ・プラザのあるオレゴン州は水が豊かな土地です。なにしろ隣りのカリフォルニア州にその水でつくった電力を売っているくらいですから、その豊富さたるや推して知るべしといったところでしょう。そのため、オレゴンには見事な水空間がいくつもあります。ポートランドのフォークコート・ファウンテンもラブリジョイ・プラザに匹敵する「遊べる」水空間です。こちらは滝の流れ落ちるところが、腰の高さくらいのプールみ

たいになっていて、このなかへザンブと飛び込んで遊べる。ここには子どもも大人も大喜びで水遊びをする、そうしたいきいきとした光景があります。

ペイリー・パーク、ラブリョイ・プラザ、フォーコート・ファウンテンなどは、いずれも水の「流れ」という表情をうまく演出した例ですが、ボストンのクリスチャン・サイエンス・センターは水の「広がり」という性質を見せてくれる水空間の代表選手でしょう。なにしろ幅二八メートル、長さ二〇七メートルの広さを持っていて、それを地面から少しだけ持ち上げることで、実際よりももっと広く感じさせている。狭い場所にたくさんの人や建物がつめこまれていた都市にあつては、この広がりという空間が何よりも貴重なものですし、それを意図してこれだけの空間をつくりだせるというのはとても素晴らしいことだと思います。

雨の積極的な利用方法

さて今までとりあげてきた例は、すべて大地の上の水でしたが、建物に水を使っているケースもあります。カナダのバンクーバーにある州のオフィスビルですが、このつくりがまた大変に素晴らしい。まず建物の天井部分

がガラス張りになっていて、その上を水が流れている。その水が最上階から下の階へ、さらに下の階へと滝になって流れています。もちろん滝のある壁はガラス張りです。ここには水の流れるとともに、水の透明を見ることができるといいます。

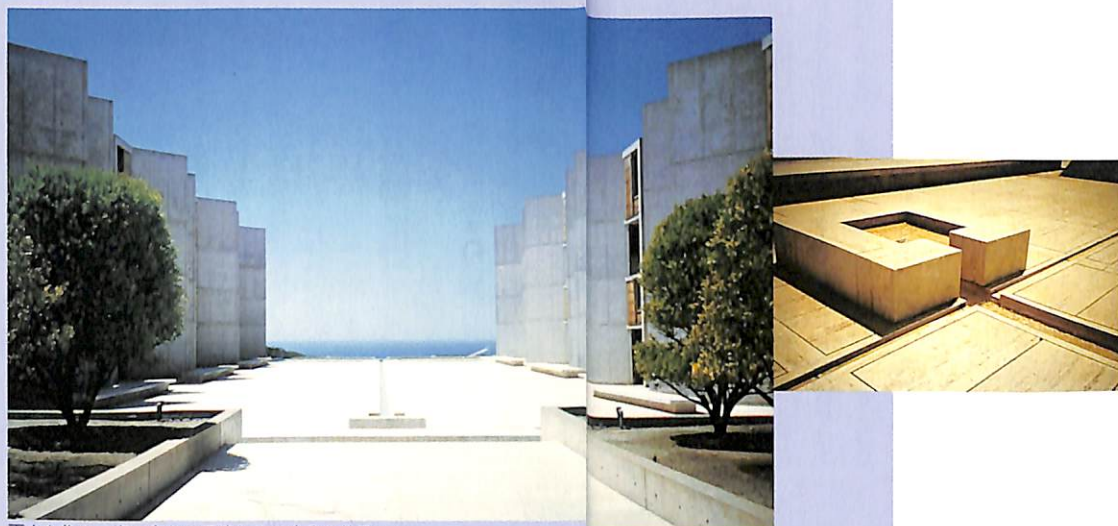
このようにどの例をとってみても、たかが人工の水空間とあなどれないものばかりです。しかし意外と少ないのが雨水を利用したデザインです。先にもお話ししたようにお金をかけることを考える前に、まず自然の循環のなかの水を利用するように配慮すべきなのです。この雨水利用の観点にたった水空間をつくっているのが、雨のほとんど降らないカリフォルニアやテキサスだということも皮肉な話です。たとえばカリフォルニアのサン・ディエゴにあるソーク生物学研究所内には、太平洋に向かって流れこんでいくような直線の水路があります。これは普段は地下水を汲み上げて流しているのですが、雨が降った時に、その水が流れ込むように中庭を横切つて雨道をつくっている。サン・ディエゴに雨が降るのは、一年で

一〇日くらいのもので、その三六五分の一〇のためにわざわざ特別の水路をつくっているのです。それにひきかえ「雨国日本」と呼ばれるわが国に、そういったデザインが少ないのは寂しい限りです。雨というのはタダで手に入る貴重な水ですから、どんどん利用した方がいい。日本の水空間を真剣に考えるのなら、これからはこの雨水を利用する方法を見つけださなければならないと思うのです。

(すずき・のぶひろ 東京理科大学助教授)

(談)

歩道より水面をわずかに上げて、満々たる水をたたえているボストンのクリスチャン・サイエンス・センター。

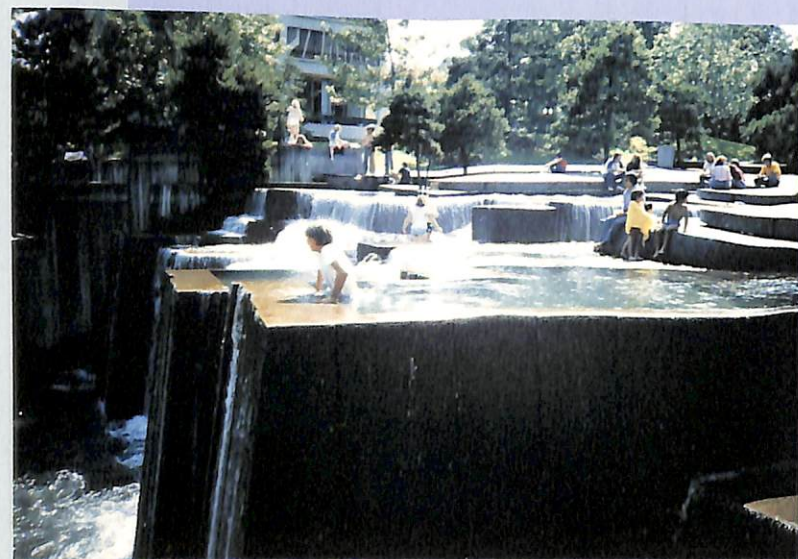


雨水を集め、海に向かって流れをつくるカリフォルニア州のソーク生物学研究所。左：全景。右：水路のようす。縦は地下水用、横は雨水用の水路。



階段状にして流れに変化をつけるオレゴン州ラブリョイ・プラザの滝。

マンハッタンを騒がせる滝の音でかき消し、別世界を演出しているニューヨークのペイリー・パーク。



子どもが遊べるように腰の高さに設計してあるカリフォルニア州のフォーコート・ファウンテンの滝。

隅田川の歴史

江戸から東京

陣内秀信

隅田川は江戸時代以前から、江戸＝東京の街にとって重要な河川であり続けてきました。東京にはこれ以外にも多摩川や荒川（放水路）といった大きな河川がありますが、都市の中心部を流れているという意味では、やはり隅田川こそが本来の都市河川なのです。しかも、その他の日本橋川や神田川といった河川は人間が人工的に掘削して整備したものにすぎない。したがってこの隅田川の周りには、江戸から今日に至るまでいろいろな要素が展開してきたわけです。

隅田川発展の契機となった江戸湊の存在

まず江戸時代初期の隅田川には、二つの大きな意味、ないし役割がありました。隅田川の周辺にはお寺やお宮がとてまたたくさんあります。浅草の浅草寺などはその代表ですが、この神社仏閣が日本人古来の水に対する感受性、感覚、つまり「水は聖なる領域である」という気持ちを起こさせる役割を果たしています。それがひとつ。もうひとつは、江戸湊の存在です。これが当時隅田川の河口にあつて、江戸の街が水の都として発展する原動力を既につくっていた。ですからその後の江戸の商業活動に大きな影響を与えたということで、これは大変重要な意味を持っているわけです。

徳川幕府になって江戸の城下町がつくられ始めた時には、実は隅田川というのはまだ都市河川ではありませんが、

でした。というより完全に都市の外側にある「エッジ」だったのです。だから江戸にとって都市河川と呼べるのは、日本橋川のような内側の堀割くらいしかなかったわけですね。ところが都市がだんだん拡大するにつれ、街の外側を流れていたはずの隅田川が、いつの間にか街のなかに取り込まれていった。江戸というのは、城壁を持たないだけに、市街地と農村の区分けが画然としていなくて、ある程度都市のポテンシャルが上がってくると、そのまますプロールしていくという特徴を持っています。その結果、川の東側の江東、深川、本所あたりまで都市が発展し、やがて隅田川は街のなかを流れる「メイン・カナール」の役割を持つようになります。そこにはヨーロッパやアジア以上に、水をたっぷり取り込んだ都市のおもしろさというものが生まれてくるわけです。

ただし江戸の場合のメイン・カナールは、あくまで日本橋川なのです。日本橋川は隅田川が栄える以前から、蔵が建ち並び、市場がつくられ、いくつもの橋が架かっている、まさに鮮やかな行き交う川だった。だからこの川は將軍のお膝元の商業都市を支えた一番重要な水の空間軸だったのです。

遊戯空間の中心的役割を担う

それが江戸時代中期以後、江戸が経済的に繁栄して、独特の市民文化が生まれてくると、隅田川の方に都市開

発のウエイトが移ってきます。開発といってもこの場合ちゃんと役割分担が決まっています。先ほど言ったように日本橋川の方には経済面が、一方隅田川の方には遊興・盛り場など、庶民に人気のある場所が集中し、文化的役割を担う川になっていくのです。たとえば両国橋の西側の両国広小路には、料亭、水茶屋ができ、火除け地としてつくられたオープン・スペースは民衆によって使われる広場となりました。そこにはいろいろな商売をする人たちが芸人が集まって、ムンムンするような活気に溢れた盛り場が生まれたのです。

なぜそうやっていったかという、これは対岸にあった両国院の影響が大きい。寺院の周辺には、必ずといっていいほど宗教文化が生まれるものですが、この両国院でもやはり開帳とか、勧進相模など一種のイベントを仕掛けるわけです。するとそこに人がどんどん集まり、さらにその人出をあてこんで見世物小屋ができたり、あるいは私娼窟、岡場所と呼ばれる遊びの場がつけられたりする。また両国橋の北側には浅草寺があるから、浅草寺と両国院、どちらに行くにも両国広小路のあたりを通らなければならぬ。ですから両国橋というのは交通の結節点であり、それゆえに人を魅きつける力を持った場所となったのです。

隅田川はこうのように遊びの場として人気を集めていただけでなく、都心部に住む人たちに安らぎを与える場所としても利用されてきました。江戸の庶民の住む都心部

の空間というのは、ものすごく人口密度が高くてうっとうしいものだった。しかも幕藩体制下で管理がきつ、いつも監視されているという窮屈さがある。だから庶民はおおらかで解放的な空間を求め、川を越えてやってくるわけです。

また都心部からは離れた地域に遊びの場があるということ、これは、為政者の側にとっても都合のいいことなのです。たとえば吉原が街のなかにあれば風紀も乱れるし、火事の原因にもなる。その心配の種をなくすために吉原のような遊び場は、ポンと街の外に出さなければならぬのです。だからこうした民衆の解放区は、多少の問題があつたとしても目をつぶって放っておかれた。そのことも隅田川繁栄の大きな理由だといえます。

幕末になると今度は天保の改革で、芝居町の猿蓑町も

浅草の外へ出され、隅田川の周辺がさらに賑わいを増すようになります。いわゆる「辺界の悪所」と呼ばれる一番エキサイティングな遊び場が、隅田川の奥深くに集中していた時期です。これが江戸文化に文字を生み、培い、美術をも生みだしました。安藤広重の「東都名所水代橋全図」という絵を見ると、当時の賑わい振りがよく分かります。屋形舟や猪牙舟などの遊興の舟がとまり、水茶屋や料亭が並ぶ風景が、画面いっぱい描かれている。この遊戯的感覚によって構成された空間こそが、江戸時代の隅田川の特徴的な風景であり、機能だったのです。

東京の近代化とともに変貌した隅田川

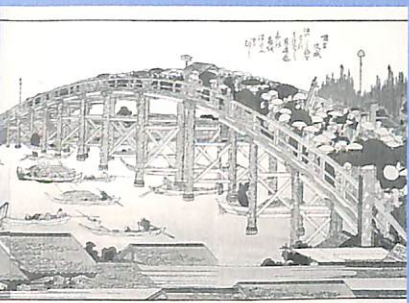
明治になると、都市が近代的首都・東京として整備さ

れていき、それにもなつて隅田川の風景も大きく変化します。たとえば両国広小路にあれだけの賑わいを持っていたちよつと猥雑な広場というものがなくなる。水茶屋とか、見世物小屋などの仮設の建物が全部撤去されて、オープン・スペースとして整備されてしまいます。この時期、隅田川は庶民文化の生まれる源としての役割を失い、その代わりに近代の経済、産業の舞台に転じていきます。この時代の鳥瞰図を見ると、かつて広重が描いた風景は跡形もなく失われ、その後には倉庫や工場が並び、この工場の煙突から黒煙がモクモクと上がっている風景が現われます。しかし、これは必ずしもマイナス・イメージではなく、近代産業を支える下町の姿が誇らしげに描かれているようにも思えるのです。

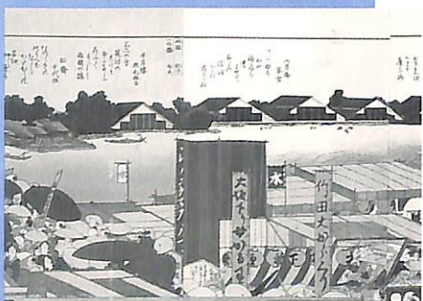
やがて大正末、関東大震災のために下町が壊滅状態と



明治時代 吉原のなかでもとくに有名だった金瓶楼 写真提供：毎日新聞情報サービスセンター



葛飾北斎の描いた江戸後期の隅田川周辺の風景 ① 両国橋 ② 両国広小路 ③ 吉原「隅田川沿岸一覽」(墨田区立緑図書館蔵)



なり、この後の都市復興とともに隅田川の風景がまたもや一変するのです。たとえば下町には、アーバン・デザイン的な感覚を持たせたいろんな都市施設がつけられます。とりわけ、近代的でスマートな橋梁の誕生は、隅田川の景観を大きく変えるものでした。橋というのは、都市の風景を形づくる一種のランド・マークですから、この時期に近代の技術と美意識によって橋が架けられたと

いうことは、近代都市・東京の本格的な誕生であると言えます。

橋について、景観上大きな変化をもたらしたのは公園です。浜町河岸の料亭や置屋があった一角が、前近代的存在として取り壊され、それに代わって浜町公園というモダンな公園がつけられます。さらに吾妻橋の上流には、両岸一キロにわたって隅田公園ができた。これは水辺の

プロムナードであると同時に、当時流行したレガッタを中心とする水上スポーツのメッカでもありました。

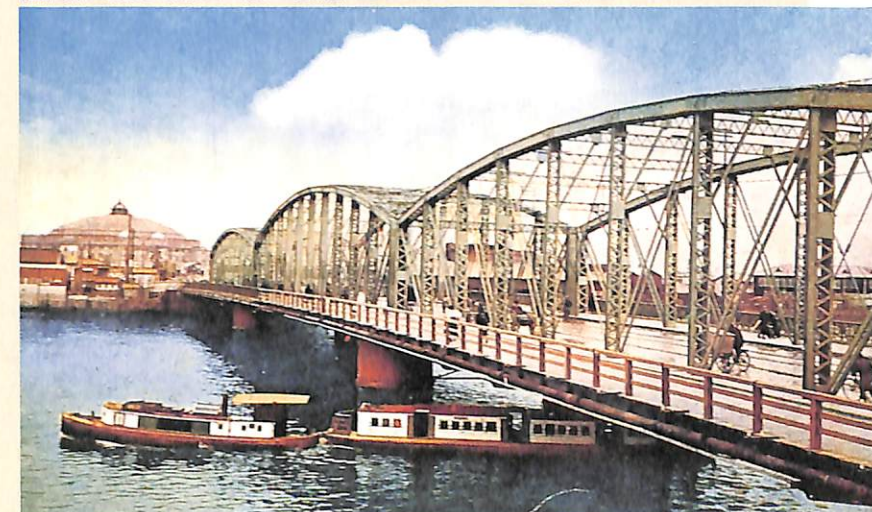
隅田川の景観がこのように近代化につくり変えられていく一方では、浅草が都市の盛り場として最後の華やかな時期を迎えています。川端康成の『浅草紅団』という小説にみられるけれど、当時の六区を中心とした浅草は、大衆文化のメッカだった。映画館が連なり、オペラ館が

大東京の鳥瞰図 THE VIEW OF GREAT TOKYO



大正時代の東京。「大東京鳥瞰図」(1921)(東京都立中央図書館蔵) 写真提供：(株)プロセスアーキテクチャ

明治18年に就航した隅田川汽船。一銭蒸気とよばれ親しまれていた。写真提供：小島惟孝



ある。最後の興行街の盛り場のおもしろさを発揮していった。けれどこれにはある重要な要素が少なくなっていた。それはもともと浅草附近にあった私娼窟が、震災で壊滅して、川向こうの玉の井に引っ越していったことです。浅草から出ていったけれど、川の向こうにまたこういう場所ができたというのが、非常に意味深長でおもしろいのです。

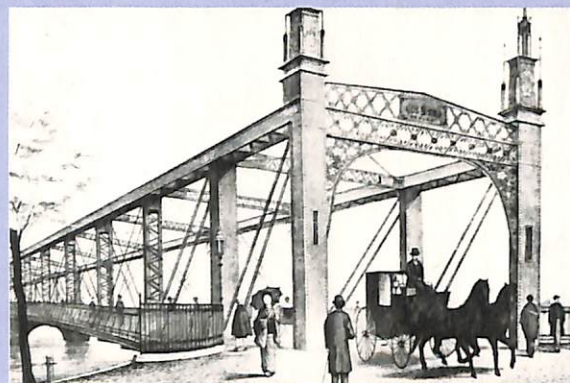
表側は隅田公園のモダンなプロムナードができ、背後

には闇の空間が潜んでいる。水辺というのは、人間の霊的なもの、聖なるもの、そして死後の世界と結びついていいるのと同時に、色街、遊郭などのアンダーワールドな世界とも結びついている。常に光と闇の二面性を持っているわけです。

隅田川は、その姿を歴史にあわせてその都度変えていったのですが、昭和になってくるともう川が痛めつけられる歴史ばかりになってしまふ。汚染されて魚も住まな

い、近くを通るだけで臭いといわれるしまつてす。それが現在になって、人々がまた川の偉大さに気づいてきた。高度成長期の一番ひどい時期に比べればいくらか良くなつて、魚も戻り、においもなくなってきた。レガッタも花火も復活されました。かつての江戸の華やかさ、美しさを再現するのは無理としても、今ようやく隅田川の復権が緒についたのです。

(じんない・ひでのぶ 法政大学助教授)



吾妻橋の今昔。㊤：現在(写真提供：大坪寛明/世界文化フォト) ㊦：明治初期(写真提供：毎日新聞情報サービスセンター)



永代橋の今昔。㊤：明治(写真提供：毎日新聞情報サービスセンター) ㊦：現在(写真提供：牛島徹行/世界文化フォト)



都市河川のアメニティを実現させた野川

最近、都市のなかの水辺の重要性が言われるようになりましたが、昔から自然、特に川が好きだった私にとつて、これは大変喜ばしいことです。もともと「人類の快適性の源は自然にある」というのが、私の持論ですからこのような動きが出てくるのも私個人からみれば当然起こるべくして起こったものといえます。

しかし、一口に水辺の復活といっても、現在の状況下ではなかなか容易なことではありません。というのも高度成長時代、川は工場廃液によってその透明さを失ったばかりか、水害防止という名目のもとに「川」本来の姿すら失ってしまったのです。そのうえ親水とは名ばかりで、かえって川の機能を低下させるような水環境づくりがなされていることも、その大きな理由のひとつでしょう。大切なのは、できあがった環境が単なるみせかけのう。自然であってほらないということなのです。

川は都市のインフラストラクチャー

では本物の自然環境をつくるためには何が必要なのか。それには三つのポイントがあります。ひとつは都市河川と丘陵の軸線を守ること。普通は自然というとまず第一

性を持たせ、長期的に保存することを考えなければなりません。たとえ今は美しくとも、それが五〇年、一〇〇年先の未来においても残されているのでなければ、自然保護というものは空しいものになってしまいます。単なるみせかけに終わらないためにも、歴史的「自然環境」をつくることは必要不可欠なのです。

これらの三つのポイントとは、言ってみれば都市河川に
対する私の哲学ですから、あまり實際的ではないかもし
れませんが。そこで次にもっと具体的な例を出してお話
しましょう。

親水を実現したアメニティ護岸

私の住んでいる世田谷区には、一級河川というのが似つかわしくないほど狭くて、大変美しい水環境を持つ野川という川があります。兩岸を緑で囲まれ、その間を澄んだ水がサラサラと流れています。カモ、サギ、セキレイなどの野鳥やコイ、フナなどの魚のメッカで、夏には子どもたちが水遊びをしたりしています。都内では珍しく親水を実現している河川です。特に成城と喜多見境を流れるあたりには、川の拡幅工事をしながら、基礎のコンクリートを土と植栽で覆いつくした親水護岸があります。私はこれをアメニティ護岸といって、やればできます。好例として全国モデルにしてほしいと努めて宣伝しています。

この野川は国分寺、小金井、三鷹、調布、狛江の各市と世田谷区というように複数の行政区を通じて多摩川に注ぎこんでいますので、各地区の行政がそれぞれに水環境の保護対策を行なっていますが、とりわけ力を入れているのが世田谷区です。特別保護区を指定したり、シンポジウムを開いたりして環境保護、および回復を推進す

に緑を思い浮かべるものですが、私の場合はそれよりも川の方が先に浮かんでくるのです。なぜなら緑は植樹によっていくらでも増やすことが出来ますが、川はおいそれとつくりだせるものではありません。それに水があつて緑は生まれるものですし、豊かな水があつてこそ緑の景観もいきてくるわけです。ですから私は緑よりもむしろ川の方が根本的なものだという気がします。したがつて、これからの都市計画は、この川を都市のインフラ（大切な基盤）の最たるものとしてとらえ、さらに河川と丘陵の軸線を守っていくことにもつと重きを置かなくてはならないと思うのです。

ただし、それだけでは真の環境保全ができるとは言いがたいと思います。そこに第二のポイントが生じるわけです。都市の水環境は、水、緑、そしてそれにマッチした橋や建物までを一貫した総合性で考えるべきだということです。それは平たく言えば、それぞれの土地が独自の個性を持っているように、川にも個性があるわけです。その個性と調和したデザインの建造物、構造物づくりが望ましい。この自然と建造物との複合の一体感が都市、自然を豊かに美しくするうえで、大変重要なことです。

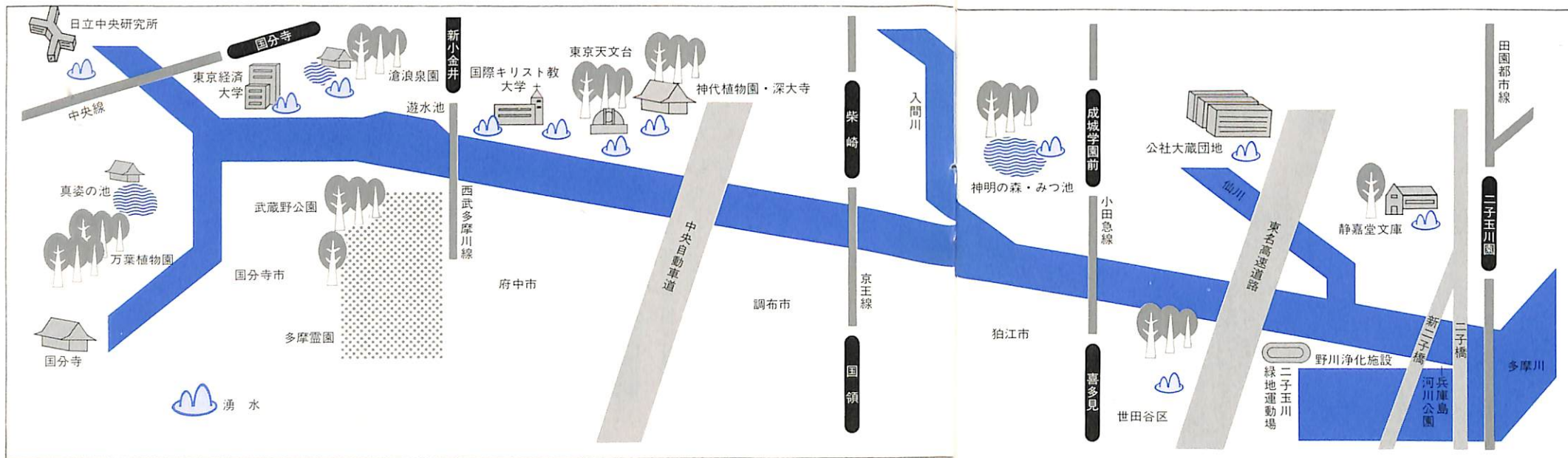
さらに第三には、こうしてつくられた自然環境に歴史をかたわら、野川周辺の環境調査も積極的に進んで行なっています。たとえば野川の流域には国分寺崖線（がけせん）と呼ばれる段丘があり、数多くの湧水が分布しているのですが、区ではこの国分寺崖線の湧水調査を学者に依頼して熱心に取り組んでいます。

しかし、ところどころサンクチュアリ（聖域）にもなっている貴重な崖線を宅造による破壊からいかに守るかが大きな問題です。そこで区ではナショナルトラスト方式による保存方法を研究会をつくって検討中です。来る十月二四、二五両日には野川にはど近い小田急線「成城学園前」駅前の区立砦会館で、第五回ナショナルトラスト全国大会をナショナルトラストを進める全国の会と共に催して開き、野川と国分寺崖線の保護を訴えることになっているのです。

行政区画を超えた水系の管理システムが必要

一方、住民が主体となって環境保全を進めているところもあります。小金井市の「井戸端議会小金井」は、小金井の自然を守るために市民が自主的に集まってつくったグループです。とうきゅう環境浄化財団の援助を受け、昭和五九年にそのグループがつくった小冊子『私たちの野川』は、住民の自然保護に対する意識を喚起するものとして大きな反響を呼びました。また野川にはたるを呼び戻そうと、都、市や各地区の環境保護グループと協力して、三鷹、小金井、調布にまたがり、泰西名画のように美しい風景の中を野川が流れる都立野川公園内に「野川はたる村」をつくり、水辺環境の回復を着々と進めています。それが発展して、来春には野川公園自然観察園が誕生し、はたる村と崖線と湧水が目玉になります。私も野川はたる村の村民になっていますが、昨年五月、世

イラストレーション●吉川真実



酒井憲一



成城と喜多見境を流れる野川。奥にはみつ池の森がうっそうと繁る。



都内では珍しく親水河川の佇いを見せる野川、みつ池附近。

ありません。水があればこそ、川と呼べるわけです。先にアメニティ護岸のところに使った「アメニティ」という言葉は、単純に訳せば「快適性」という意味ですが、英国の都市計画家ウィリアム・ホルフォード卿によれば「あるべきものがあるべき場所にあること、すなわち全体として快適な状態」と定義されています。これこそ川の何たるかを言い当てているのではないのでしょうか。当たり前のことですが、川にとってあるべきものとは「水」な

のです。川が川であるためには、当然あるべき水を確保しなければなりません。野川にとって今必要なもの、そのことなのです。この対策として世田谷区では雨水浸透マス実験を行ないました。穴あきコンクリートブロック、砕石または砂利の二重構造になっているマスに雨水を溜め、溢れだしたものを下水道に流すシステムです。区ではこのマスの小さなものを各家庭に普及させようと努めています。そ

の他にも道路には透水舗装を徹底させるなど、さまざまな対策を施しているのです。このように都市の水辺は多くの人々の努力によって守られ、ようやく本来の姿を取り戻してきました。けれども、それはまだほんの一部分でしかないのですから、これからは今ある河川を守ると同時に、その輪を広げていくことが課題になるのではないのでしょうか。(談)

(さかい・けんいち 成城短期大学講師)

ところが、このように各地区が別々に管理をしているということは、大きな問題点でもあります。川はその流れが物語るようにひとつの道筋であり、決して分断されたものではないのです。世田谷は世田谷、小金井は小金井、三鷹は三鷹で対策を講じるのではなく、小さな水系までをも含めたネットワーク全体を、人々が一丸となって守っていかなくてはならないのです。そこには行政区画を超えた統一的管理システムが作りだされるべきではないかと思うのです。

とはいえ一時はドブ川と化したこともある野川が、やっと自然の姿を取り戻してこられたのも、これまで懸命に保護活動をしてきた人たちのおかげなのです。今や野川は、都市河川の理想的な姿となってきました。喜多見にある区立次大夫堀公園などは、江戸の面影を残した歴史的な自然風景が広がっていて、ここが東京かと思うほど野趣豊かなたたずまいを見せています。そもそも次大夫堀は建長年間(二四九―五〇)に用水奉行の小泉次大夫が開いた用水路で、一時はダメになってしまったものを野川から水を引いて浄化し、最近、再び昔の姿に復活させたのです。これは歴史と自然を融合させた非常に良い例でしょう。世田谷はこれ以外にも多摩川との合流点にある兵庫島公園、東京の中の幽谷である等々力溪谷公園と歴史的水環境は申し分のない状態にあります。

このように歴史や自然を回復した川もあれば一方ではもう絶望的ともいえる河川もあります。同じ世田谷区内を流れる一級河川で野川より狭い仙川は垂直のコンクリート護岸で殺風景です。同じ区内、それも同じ成城にあつてこれほど河川の良し悪しがはっきりしているというの驚くべきことです。仙川を見ると、野川は世田谷に残された最後の砦なのだという気がして、今まで以上に野川を大切に保護していかなければならないと感じます。しかし野川も今、水量の減少というとても深刻な問題をかかえています。なぜ減ってしまったかというと、舗装や下水道化が進んだこと、それに涵養材として緑が伐採されてしまったことが挙げられます。これが悪化すれば野川はそううち一滴の水もない川になるでしょう。けれども水がなくなってしまうのは、それはもはや川では



江戸の面影を残す自然風景が広がる次大夫堀公園。

大きな問題は水量の減少

東京は、江戸の頃から大火とか地震とかがたくさんありました。幕府も大火にはずいぶん悩まされたようで、土蔵づくりをすすめるなど、いろいろやりました。

明治政府になって近代都市計画を日本は初めてやり出したわけですが、その対象は国会議事堂や東京駅でした。国家の中枢管理機構をまず欧米並みにしようというのが一番の目的でしたから、庶民一般の住宅はいかかわらず木造のままだったわけです。

そこに関東大震災がきた。当時は環状線の内側ぐらいが住宅密集地帯で江東地区に下町があふれ出ているといったぐらいが東京の範囲でした。大震災は東京を壊滅させました。地震で建造物はのきなみ崩れ落ちました。けれども被害をより大きくしたのは、地震そのものよりも、大火になったからです。街の中心部や下町の木造家屋から火が出て、またたく間に街を火がおおいつくしたのです。この大火で家を失った人たちが後に高円寺や阿佐が谷などの郊外へ移り住むわけです。とにかく大震災で東京は火の海と化したのです。

大震災のあとすぐに復興計画が出されました。当時の内務大臣・後藤新平が復興院の総裁になって大ぶろしきと言われるような区画整理を発表しました。ところが全体の予算が、国家予算ぐらいになってしまった。それでだんだん縮小され、結局区画整理によって道路幅を広げたり、小さな公園をつくるぐらいのことで終わってしまったわけです。たとえば昭和通りが、この時できた道路のひとつです。住宅の方はというと、あいかわらず震災前と同じようなバラック復興になってしまった。もう少し東京全体が

まちづくり 思い出 ばなし ⑧

2度の壊滅的打撃によって ようやく防災への関心が芽ばえる

高山英華

よくなってきたら建て替えればいいだろうといいながら、とりあえずバラック復興ですませてしまったわけです。

さて太平洋戦争になって、東京はもう一度空襲によって壊滅させられてしまった。ヨーロッパの都市も爆撃を受けましたが、レンガや石造りですから大火にはならない。日本は木造で、しかも密集しています。おまけにアメリカは焼夷弾で攻撃してきました。B29に焼夷弾を積めるだけ積んでやってきて東京上空で落としました。東京はひとたまりもありません。下町の方から中央線の方まで完全に焼け野原になってしまった。

戦後再び復興計画が出されましたが、なにせ敗戦国で、たよるところもない。またしょうこりもなくバラック復興になってしまった。近代都市になってから二回壊滅的打撃を受けて、二回とも復興するのですが、いずれも住宅地に関してはバラック復興だったわけです。

それではいかんというので、東京も本格的に防災を考えなければいけないという意見が出されるようになるのが、戦後しばらくたってからですがこのつづきは次回にしましょう。(談)

(たかやま・えいか／東京大学名誉教授)

INFORMATION

○バックナンバーの紹介

『CITY & LIFE』は、おかげさまで創刊以来各方面のご好評をいただき、本号をもってNo.9まで発行してまいりました。今後ともご愛読を願い、よりよき都市生活をおくるためお役立ていただきたいものです。

(内容は主要部分のみ)

No.1 特集「都市の幹線道路」(1984.2)

花のバリエーションはどうして造られたか／鈴木博之
〈座談会〉昔の道、今の道／井上孝・日笠端・高見澤たか子
幹線道路——道のしくみと生活／小場瀬令二

No.2 特集「都市公園」(1984.5)

〈座談会〉いま、公園抜きに都市は語れない
／佐藤昌・日笠端・高見澤たか子
造園の博物誌／鈴木博之

No.3 特集「都市と河川」(1984.12)

偉大なる川、ラインの旅／小塩節
〈座談会〉川とともに生まれた都市、都市とともに育つ川
／高橋裕・日笠端・高見澤たか子
川から見たヨーロッパの都市空間／樺山紘一

No.4 特集「子どものための都市計画」(1985.6)

〈座談会〉都市計画と子ども空間／日笠端・小川信子・大村謙二郎
子どものための住宅環境／延藤安弘
子どもたちは、まちのどこで遊んでいるのか／加藤仁美

No.5 特集「都市と盛り場」(1985.12)

〈座談会〉文化的な活力を生み出す盛り場の源流を求めて
／日笠端・陣内秀信・高見澤たか子
ロンドンと盛り場／山岸健
都市計画手法でつくられた東京の副々都心吉祥寺の盛り場

No.6 特集「都市生活と神社仏閣」(1986.5)

江戸の都市空間と神社仏閣／陣内秀信
〈座談会〉都市の聖なる空間／伊藤いづ・樺山紘一・鈴木博之

No.7 特集「住宅地の道路と家並み」(1986.9)

住宅地の道路の成り立ち／日笠端・高見澤たか子
〈座談会〉欧米と日本・住宅地の家並みと道のデザイン
／芦原義信・日笠端・陣内秀信

No.8 特集「都市とヒューマンスケール」(1987.3)

ヒューマンスケールとはなにか／戸沼幸市
〈座談会〉ヒューマンスケールと都市
／柴田徳衛・横文彦・尾島俊雄・戸沼幸市
ヒューマンスケールを考えたまちづくり／田村明
まちづくり思い出ばなし⑦(Na2より連載)／高山英華

▲第一住宅建設協会の経歴▼

昭和三〇年、第一生命保険相互会社の基金をもとに設立された財団法人であります。設立以来公益法人の理念にもとづき低廉質実な住宅の供給と、住宅にかかわる土地利用計画・居住環境計画・住生活改善に関する調査研究をつづけ、民間として稀有の建設大臣表彰と建設大臣感謝状をうけました。

▲本誌発行の趣旨▼

住宅戸数はすでに全世帯数を上まわり、しかも都市化がすすむなかで、私たちはより快適で充実した生活を求めています。堀で囲まれた屋敷の中に豊かさを求めるだけでなく、膨大な資本の投下された市民のためのいろいろな都市の施設を、自分の生活の中に位置づけ上手に利用する方法を知ってほしいと思います。そのために、都市のいろいろな「しくみ」と使い方を西洋・日本の都市を事例にとりあげ、どなたにもあきることなくご理解いただけるよう、年二〜三回の予定で編集発行していききたいと思っています。

▲編集後記▼

〇都市のなかに、川・池・海など水辺といわれるところは少ない。

これらの稀少価値が見直され、保存・改善などによって美しい水辺がつくられ、水に親しみ心をやすめる空間づくりがさかんなことはいずれのことだ。

〇しかし、実際の都市生活のうえでは、水辺のあるところは住まいの場所から遠い場合が多い。一度は装いあらたな水辺に行ってみるのだが、二度、三度と行ってみる気にならないところが多い。きれいな水と緑豊かな景観のほか、もって本質的に人間の心をとらえるものとダブらせられないだろうか。

〇サンフランシスコやボストンの水辺開発をみると、そこには水族館・博物館・飲食店・ブティック・イベント等を寄せ集める仕掛けがつくられいつもにぎわっている。

〇水辺に人をどうやって集めるかということも、水辺空間づくりの課題のように思う。

(常務理事・徳田敦司)

City&Life NO.9

●企画委員

日笠端(東京大学名誉教授)+日端康雄(筑波大学社会学系助教授)+高橋公子(日本女子大学住居学科助教授)+徳田敦司(当協会常務理事)

●1987年7月発行

■編集・発行・財団法人第一住宅建設協会

東京都中央区京橋2丁目4番12号

03-281-5773

編集・デザイン協力

株式会社アルシーヴ社・ライス・スタジオ

印刷・株式会社恒陽社印刷所

頒価・300円+送料200円



